
ヴァルガス家三男です。

五十嵐 黎兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァルガス家三男です。

【Nコード】

N9992T

【作者名】

五十嵐 黎兔

【あらすじ】

いきなり死んだといわれ、そしていきなり転生させられたのはヘタリアの世界！？え、この人達が兄？って・・・ええっ！？訳も分からず個性豊かなキャラ達に振り回されるこの子は、アオイ「ヴァルガス。ヴァルガス家、三男です！！不定期更新に戻りました！！時々シリアスでも、9割ふざけてますからね！それと作者がない脳みそ使って考えたねっ造キャラも出てますのでご注意ください！！

はじまり

え・・・・・・・・死んだ？

「うん、死んだねー。」

は？何言ってるんのこの人。頭狂ってるなら病院行った方が・・・・。

「君見かけによらず失礼だねー。頭はくるってないから安心してよー。」

え・・・・てか僕声出しててる？

「出してないけど、解るよ君が何考えてるのかくらい。」

変人だ・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！

「だから失礼なやつだね！！いくら神様心広くてもぶんぶんだぞー！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ちょ・・・・マジで引くのとかやめてくんない！！！！悪かった！！
今のはこっちが悪かった！！」

で・・・・死んだってほんと？なんで、どうして？僕まだ15だ。
寿命とか言わないでよ？

「何にも覚えてないわけ？」

????????????????

「近藤葵、君は下校途中ひかれそうになったねこの代わりにトラックにはねられて即死。それを見かけた慈悲深い神様が君を生き返らせてあげよう!!」

慈悲深いとか自分で言っちゃってるこの人、やっぱり病院に・・・。

「でも、もう近藤葵としては生き返れないからね!。」

は?え?はああああああああああああああああああああああああああああ!!?
ああああ!!?

「大丈夫大丈夫。君の過去、前世その他もろもろを考慮してちょうどよさそうな世界に転生させるから!」

どこが大丈夫だよ!!!えちよ・・・なにしてんの!?て、なんかしたに穴できたあ!?うわああああああああああああああああああああああああああああ!!!

「新たな人生、楽しんでね、近藤・・・いや・・・アオイ!!ヴァルガス君?」

こうして僕はどこだかわからない世界に無理矢理転生させられた。

はじまり（後書き）

アオイの一人称を僕か俺かで悩んだ。けど、あえて僕にしてみた。
さて、これからどうなるんだろうねーww

三男って・・・僕ら血、繋がってるの？え、それ禁句？（前書き）

てか、アオイの立場、どうしよう？国じゃないし、ただの人？

うーん・・・ま、規格外ってことで！！

三男って・・・僕ら血、繋がってるの？え、それ禁句？

朝。それは毎日、なんの変りもなく訪れる。それはどこも一緒。全世界共通のこと。それは此処イタリアでも同じである。

「ん・・・ふああああああ・・・朝か・・・。やつぱ、なんか落ち着かないなあ・・・。」

転生させられてから一週間後。（時経つの早くね？つかめんどくさくて省いたとかそんなじゃないからな！b y通りがかった某眉毛）

初めはイタリアという未知なる土地や、いきなりできた兄たちとか、周りにいる個性豊かな人たちとか、戸惑うことはいっぱいあったが、それでも元近藤葵こと、アオイⅡヴァルガスは生きております。どうやら此処というかこの世界には国が擬人化？した人が普通に生活しております。僕の兄になった二人もそうです。またその兄二人が結構心配な2人なんですが・・・。あ・・・。」

「そつえば、今日会議だって昨日の晩ルートさんから電話あったっけ。起こさなきゃ・・・。」

アオイはベットから抜けだすと、パジャマを脱ぎ簡単にＴシャツとパーカーとカーゴパンツをはいて、兄の部屋へと向かう。

兄は二人いるが、そのうち長男にあたる方は現在違う人の家にいるらしい。何か子供のころからその家にすんでて、こつちにはあまりいないらしい。まあたまに帰ってきては、なにかと弟（あ、僕じゃないほうね）に泣かされて？帰ってくけど。

兄の部屋について、まずはドアをノックする。

「フェリ兄さん……！！朝だよー！！会議あるんでしょー！！！！」

『……………』

返事無し。きつとまだ寝てる。絶対ねてる。千円かけてもいい。あ・
・こっちはユーロか。仕方なく、アオイは中に入った。なんで最初から中に入んなかったかっていうと……………。

「……………また半裸……………まあ……………パンツ履いてるだけですけど……………やっぱなれないなあ……………」

ぐーぐーと、器用に鼻ちようちんふくらまして、掛け布団に抱きついて寝てるのが、アオイの兄の一人、フェリシアーノ・ヴァルガスだ。幸せそうに笑いながら来るんのアホ毛を揺らして寝ている。

「フェリ兄さん！！朝だつてば！！」

いくら大声を上げようが、起きる気配はない。もともと昼近くになつてようやく起きだす兄なのだ。こんな朝早くに起きるなんて奇跡に等しい。

だから、もう残された手段はこれしかない。

「早く起きないと、朝ごはんのトマトとアサリのパスタ食べちゃうけど……………」

「ヴェー……それはだめえ！！起きるから食べないでえ！！」

「おはよ、フェリ兄さん。」

「ヴェ・・・パスタはあ？」

「まだ作ってないよ。今から作るから、顔洗ってきてよ。」
「わかったー。」

半裸のまま兄は洗面所に向かった。なんか着ようよ、とりあえず。そう思いつつ、僕はキッチンへと向かい、朝ごはんの支度を始めた。

三男って・・・僕ら血、繋がってるの？え、それ禁句？（後書き）

また悩んでしまいました。

フェリ兄ちゃんにするか、フェリ兄さんにするか・・・。

今も悩んでいます。フェリ兄ちゃんのほうが可愛いけど・・・あとフェリと兄弟だになって感じるけど・・・うーん・・・。

この人が兄だと思うと・・・

出来たてのパスタを美味しそうにほおばってくフェリシアーノ。て
いうかあのね・・・。

「せめて服着てくれないかなあ・・・なんて思ってみたり・・・。」
「ヴェー。今日暑いよねー。」

「うんそうだねって違うよ！！確かに今日は朝からちょっと暑いけどさ、そうじゃないでしょう！！人として、服着るのは当たり前でしょ？」

「ヴェー？暑いんだから着なくてもいいじゃん。アオイったら、変なのー。」

変って言われたー。ちょっと泣きたい。ぐすん。

「だって・・・パンツいつちよで食卓囲むとかなり得ないよ？」

「えー、これ普通だよー。アオイも脱いじゃないなよー。」

「全力でお断り！！そんなんじゃこの家変態の集まりみたいだよ！！」

「え、変態どこー？」

無自覚？KY？ううー・・・ヘルプミ・・・？

「・・・って・・・フェリ兄さん。」

「ねーねー、その兄さんってやだなー。」

「え？」

「兄ちゃんが良いよー。てかフェリでもいいよー？兄さんってなん

か硬いよ。ルートんちみたいだし……。」「でも…………。」

まだ僕自身、なれてないわけで。結構すんなりというか、なんか最初から弟いました設定？になつてたけど……。僕はもともとこの家の子じゃないし……。だからどうしても『さん』になつてしまっただけ…………。（最初は敬語だったけどそれもやめてって言われた。）うーん…………。

「じゃ、フェリ兄ちゃん。」

「ん、なーにー？」

うん、満足そうに笑ってる。でも笑ってる場合じゃない。

「会議じゃないっけ？」

「……………え……………つとねえ……………あれ、そうだったっけ？」

誰かこの兄なんとかして！！

「何時からー？」

「……………え……………つとねえ……………」

昨日ルートが電話して来た時にしたメモを見るアオイ。

「9時から……。フランスさんの家の会議場で……。って9時！？」

現在、8：26。妙に細かい。

「フランス兄ちゃんなら大丈夫大丈夫。隣だし。」

「移動時間考えたら、遅刻だよ。」

「ヴェ！？やば・・・またルートに怒られる！！いい・・・行つてきます！！」

「！！！！！！！！？？？？待つて兄ちゃん！！服着て、服！！！！！！！！」

「ヴェ！？スーツ！？どこ！？」

「部屋のクローゼット

！！！！」

「ヴェ
！！」

現在、10：49。何故にそんな微妙な時間・・・。
フランスの家にある会議場前。

「遅刻だ・・・ルートに・・・アーサーに・・・怒られるよ・・・。」

「って・・・なんで僕まで！？」

何故かがつちり腕を掴まれて、アオイもきております。何故！？

「ヴェ・・・俺一人じゃ無理・・・。アオイも来てよ・・・。怖いよ、ルートとかルートとか・・・。」

「ルートさんばかり・・・。だから早く起きてつて言ったのに・・・。大体、僕国じゃないしさ・・・。」

「アオイはいいの。特別だから。さ、いこう。仕方ないけど・・・。あ、そのかわい・・・。フェリ兄ちゃん！！」ヴェ・・・。

。
L

ナンパ仕掛けた兄を引きずって、アオイは会議場に足を踏み入れた。

この人が兄だと思うと・・・（後書き）

困った兄を持つと末っ子ってしつかりするものですね。たぶん。うちは逆。まったくだめだめなのび○くんな弟なのでね。かといって私がしつかりしてるかは不明ww

後やっぱり兄ちゃんにしました。そっちの方がアオイには似合うんです。

何度見ても・・・踊ってるww

「フェリシアーノ！！！！！！！！！！貴様、何回言ったらわかるんだ！！！！」

「ヴェー！！ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！なんでもするから、首絞めないでええ！！」

うん、わかった。フェリ兄ちゃんがルートさんに首絞められて怒られるのは・・・わかってたけど・・・懲りようよ。ね、兄ちゃん。

「大体、前回もそのまた前回も 以下略 お前はどれだけ遅れれば気が済むんだ！！」

「ヴェー？気が済むってどこに住むの？」

うん、ルートさんの額に青筋浮かんだのは気にしちゃだめだね

「ルートさん、そろそろ許してあげてください。これでも早い方だったではないですか。」

「菊。助けてー！！」

今まで、やや無視してた菊がフェリシアーノを解放するようルートに言った。その辺はなれてる。ようやく解放されたフェリシアーノはよたよたとアオイの方にやってきた。

「首もげてない？」

「怖いよ！！大丈夫、もげてないから・・・。（もげてたらここま
で来れないでしょ！！）」

「よかったー。」

「なんだ、アオイも来ていたのか。」

「おはようございます、アオイ君。」

「おはようございます、ルートさん、菊さん。」

この二人とももう知り合っただ。来て次の日くらいに。なんかほんとに今まででもいましたって感じに二人とも僕の名前知ってるし、普通に会話かみ合うしで・・・違和感無いのが違和感ある。（？自分で言うててよくわかんないや・・・）

「あの、アオイ君はここに何故？」

菊さんナイスだよ！！僕もそれ聞いてほしかった！！でも、言っただぶんまた兄ちゃん、ルートさんに首絞められちゃうかなあ・・・。

「えっと・・・フェリ兄ちゃんに引きずられて・・・ルートさんが怖いからと・・・一緒に来てって言われたんですよ。」

「フェリシアーノ・・・。」

「ヴェエ・・・それは内緒だっけ言っただじゃんアオイ。」

「ご苦労さまでしたね、アオイ君。」

「いえ、それほどでもないんで・・・。」

「おい、お前らいつまでやってんだよ。」

菊さんに褒められて若干照れてた僕や、フェリ兄ちゃん達のところに行ってきたのは・・・。

「会議すすまねーだろ。」

ツンデレ、眉毛、変態・・・ほかにはえっと・・・アーサーさんがやってきた。

「だって僕これから洗濯とか掃除とかやんなきゃいけないんだよ？
兄ちゃんどうせ帰ってきたらシエスタじゃん。もう、誰がやるの？」
「アオイだねー。んーわかったよー。じゃ、あとでねー。」

につこり手を振ってくるフェリ兄ちゃんに別れを告げ、他の皆さん
にも別れを告げて、僕は一度家に帰った。

何度見ても・・・踊ってるww(後書き)

更新とまんねww

どうしよう。このままだと時間が許す限り・・・
新連載しすぎるw

登場人物。（前書き）

ヴァルガス家三兄弟の紹介。

フェリシアーノとロヴィーノは本家引用。

登場人物。

アオイ＝ヴァルガス（近藤葵）

165センチ。46キロ。A型。15歳。3月17日生まれ（これは偶然一緒だった。）

猫助けて死んじゃったけど神様に慈悲をかけられ転生。

死ぬ前は普通の中学三年生。ちなみに成績・・・中の上。

黒髪・黒瞳 茶髪・碧眼に。くるんはないよ？

ヴェルガス家唯一のヘタレじゃない子。

家庭の事情で家事全般できる。

元日本人だから空気読めるよ。

シエスタは基本しないけど、兄に誘われたらする。けど限度はしっかり知ってる。

フェリシア＝ヴァルガス

アオイの兄ちゃん。

お茶目で泣き虫でヘタレなラテンっ子。

パスタと女の子とシエスタ大好き。

やる時はやるけどいままでそんなことあったかなあ？

何かと弟に頼ってばっか。

ロヴィーノ＝ヴァルガス

アオイとフェリシアの兄ちゃん。

現在アントーニョの家に居候中。

フェリシアノとはちよつと仲悪いけどアオイとは仲よし。

でもツンデレだから素直じゃないよ。

やっぱ泣き虫でヘタレなラテンっ子。

トマト大好き。

登場人物。（後書き）

アオイ君にくるんはありませんww今のところは・・・え？
後見た目変わってたんですね。見た目はつんつんしてないロヴィー
ノって感じです。髪型は菊っばい。元日本人なのでww

ねこも飼い主に似るんだね。(前書き)

ねこたりあのかawaiiさは異常ww
みんなかわええの。

ねこも飼い主に似るんだね。

会議場から帰ってきたアオイ。休む間もなく、洗濯を干し、掃除を家じゅうします。二階の廊下を掃除機かけていた時、ぺたぺたと足を何かが触ってくる感覚がありました。

「あ、君たちの事すっかり忘れてたよ。いまご飯用意するから、待っててね。」

「ヴェニャー。」

「ニャ。」

足にすり寄ってきたのはフェリ兄ちゃんの猫と僕の猫。フェリ兄ちゃんの猫は、茶色い丸模様があるちよつとちっちゃい猫。ちゃんってくるんまであって、すっごい兄ちゃんにそっくりなんだよね……。僕の猫は、同じくちっちゃいけどくるんはなくて、黒と茶色のぶち猫。ってことは、僕の猫は僕に似てるってことなのかな……。

アオイは二匹の猫と共にキッチンに向かった。

「うーん……。毎回困るんだよね……。僕、猫飼ってなかったし……。キャットフードでいいかなあ……。日本なら猫まんまとかいろいろ考えるんだけど、ここイタリアだしね……。」

二匹のそれぞれの器にキャットフードを開けて与えてみた。二匹はうれしそうにはぐはぐと食べ始めた。

「ヴェニャー。」

「え……。まさか、おかわり!？」

「ヴェニャー。」

そうだ。と言わんばかりに頷くフェリ兄ちゃんの猫。僕は仕方なくもういっぱいあげた。それもおいしそうに平らげる。こういうところみると可愛いなっと思う。僕は元来動物は好きな方なんだよね。ただ転生する前はペットのためのマンション住まいだったから、飼えなかったんだよね。

食べ終わった後二匹は揃って外に出かけていった。

「車には気をつけてねー!!」

轢かれちゃわないようにと……

あと僕みたいな人間がもう現れないようにね、うん。あの神様、ちよつと横暴すぎるよね、なんでここなんだろ。ま、いいけどさ。楽しい人生送ってるし。

「そういえば、僕の猫。ちよつとあの時の猫に似てるかもね。くす・・あの猫可愛かったからつい助けちゃったんだよね・・無我夢中で、死んじゃうかもなんて考えてなかったし・・。」

「ヴェニヤ

!!!!!!!!!!!!!!」

「ニヤ!?ニヤニヤニヤ!!」

「……助けになんか行かないぞ……。またどうせ水たまりにはまってるんだろうな……。うん。」

そしてアオイの想像通り、フェリシアーノの猫は水たまり（ちよつとふかめ）に足を取られてのたうちまわっていた。その傍らにおど

おどしたアオイの猫がどうしようかと挙動不審になっているのは、
のちにアオイが助けに行かざるを得ないという事を現してるのかも
しれない。

ねこも飼い主に似るんだね。(後書き)

ちなみに私も猫飼ってないので、結構この話は想像で描きました。

いつかかってみたいなあなんて思ってみたりw w

つかまったから助けつつて……僕一般人！！

『アオイーアオイー。助けてー。』

「……今度はどうしたの、フェリ兄ちゃん。」

夜。それも深夜に近い時間。僕はそろそろ寝ようとしてただけど、電話が鳴る音にしぶしぶベットを抜け出したんだ。そして、電話の相手はやっぱりというか、半泣きの兄ちゃんだった。

『つかまっちゃったんだよー！！』

「今度はだれに？アーサーさん？それとも、アルフレッドさん？フランシスさん？」

『ヴェ、なんでわかったのー？』

「ええ！？三人！？」

『だって、パスタくれるって言われてついてったのにさ……。出てきたのハンバーガーなんだよー。ありえないよねー。』

「ねーじゃないよ！！前もそんなことじゃなかったっけ！？」

『そーだっけー？』

あの三人が手を組んだのかなぁ……。でもあの三人が？

にしてもまた食べ物につられるなんて……。しつけがなってない犬みたいだよ……。

「あの……。僕じゃなくて、ルートさんとか菊さんに……。」

『二人に連絡つかないよー！！！！だから助けてよ、アオイー！

！！』

とうとうシカトされたのかな・・・菊さんにまで・・・？

助けてって言われるとなあ・・・・・・・・・・うーん・・・・・・・・。僕国
じゃないし。あの三人じゃ、ちょっと困るんだよね・・・・・・・・。僕
あの人たちと対峙するとか無理そうなんだよね・・・・・・・・。んー・・・
兄ちゃんはこの際いい教訓としてほおっておくとか・・・・・・・・。たまに
は自力で頑張りなさいとか？・・・・・・・・いや、そんなの無理だ！！な
んか悪い方にしか行かない気がする！！うん。ってことはつまり・・・
。。。

「わかった・・・・・・・・いくから、今どこ？」

ことういしかないわけで・・・・・・・・。。

『アーサーの家。』

「うん、じゃ助けに行くから待っててね。」

がちゃんと電話を切った。

「懲りずにつかまっちゃうんだからなあ・・・・・・・・。。。」

ぴんぽーん！！

「ってこんなときにだれ！？」

驚きつつ、アオイは玄関に向かった。そしてドアを開けるとそこには。

「久々に帰って来てやったぞ、このやろー。」

「ロヴィーノ、荷物なんで俺に持たせるん？」

「兄ちゃん、アントーニヨさん!!」

これは天の助けかなあ!! ありがとう神様!! あ、あの変人神様に言ってないけどね。ほかの神様。……………いるよね、あの神様だけじゃないよね。

「どうかしたん？」

「フェリ兄ちゃんがつかまってるんですけど……………」

「あいつ……………またか……………」

「とにかく一緒に来て

!!!!」

「うお!?!」

「ちょ……………引っ張んじゃねーぞこのやろ……………」

こうして僕は頼れそうな二人を連れて、アーサーさんの家へと向かったのだ。

つかまったから助けってって……僕一般人!! (後書き)

やっとロヴィーノを出せた。結構前に出していたかったんですけどね、なかなか……。親分とセットなのはセットじゃなきゃいやだからです。(自分勝手だぞ、このやろー。) うん、そうだねw

てけてけてーん……トマト……！（前書き）

某青いネコ型ロボットがポケットからアイテム取り出すときの効果音。

はい、だんだんサブタイトルふざけてきます。

てけてけててーん!!トマト　!!

で、アオイは二人を連れてアーサーの家に来ました。

「フェリちゃんも相変わらずやんなあ。」

「これだから馬鹿弟は・・・困るんだぞこのやる。」

「とりあえず、入ろう。」

不法侵入・・・許してね?ってか、君ら（連合）も普通にやってるし、いいよね。うん。

どたどたどたどた（アオイ達がアーサーの家を進行してる足音）

「うわーーーーーん・・・やだあ・・・ゆるしてえーーーーいやだあああ!!」

「この声・・・。」

「フェリシアーノ!!」

「兄ちゃん!!」

その声がするドアを開けて見えた光景は・・・

何故か犬小屋入って号泣してるフェリシアーノ。

何故か落ち込んでるアーサー。

大笑いして床をのたうちまわってるフランス。

フランスと同じくアルフレッド。

なにがあっただろう・・・。

「ええい、めんどくさい！！やい、兄ちゃん返せ！！」

「・・・はっ・・・ってアオイ！？なんでこんなところにいやがんだー！！」

「ぎやはは・・・アオイじゃん！。なにに？お兄さんに会いに来たの？」

「君もハンバーガー食うかい？」

「いきません！！兄ちゃん返してください！！」

「は、せっかく手に入れた人質、黙って返すかってのー！！」
「ヴェーたすけてー。」

対峙する三人と三人。人数的にはイーブンだが・・・こっちはヘタレ含むだ。明らかに不利。しかも武器もなく経験豊富な三人相手じゃ・・・。

「武器ならあるで…?」

アントーニヨが言った。

「あるんですか!」

「ほらこれやで、じゃじゃじゃーん、トマト　!」

某ネコ型ロボットのようどこからか大量のトマトを出したアントーニヨ。何、それは貴方の特技ですか? 不思議なポケット持つてるんですか?

「ちなみに熟れすぎてもう売りもんにならへんトマトを使用してるで? ええ子のみんなは食べ物こんな風に使ったらあかんよ?」

「誰に言ってるんですか?」

「気にしたらあかんで。さ、二人もこれ持って、それでな。」

で、アントーニヨの考えとは……。

「ぎゃああああああああああああああああああ! 何でトマト投げてくんだあ!」

「うわあああああ! なんとかしてなんだぞアーサー!」

「なんとかってなんだよ! つか俺んちトマト漬けにする気かあああああああああああああああ!」

トマト投げるだけ。ああ、アーサーさんの家が真っ赤っか。うは・・
・匂い付きそудよ。ご愁傷様です。

「さ、今のうちに、にげるで!」

こうして僕らは無事、フェリ兄ちゃんを救いだせましたとさ。ちやんちゃん!!

「までこら!!俺んち元に戻せえ!!」

真っ赤に染まった部屋からアーサーの叫び声が聞こえた気がする。

だが無視するのは言っまでもない。

てけてけてーん……トマト……！（後書き）

アーサー不憫。ごめんね？

トマトって服とかに落とすとなかなか落ちませんよね。アーサー、
どうするんですよ。私は知らぬふりをします。

いや、僕男の子なんで・・・ピンクはちょっと・・・(前書き)

あれー・・・こんどはアオイ君が不憫？

ちよつと女装ネタ入ってますよww

いや、僕男の子なんで・・・ピンクはちょっと・・・

今日は兄ちゃんがルートさんや菊さんと出掛けてるので、僕は一人で猫と戯れてたんですが・・・。

ぴんぽーん。

誰か来たんですよこれが。にしても、だれだろ。

「久しぶりだし。」

「フェ・・・フェリクスさん？」

うん、フェリクスさんだったね。ていうか、その手に持ってる袋がすごい気になるんだけどなあ・・・。

「フェリシアーノいるん？」

「兄ちゃんなら、ルートさん達と出掛けてしまってますよ？」

「ちようどよかったし、今日はおまえに用があるんよ。」

けらけらと笑いながらフェリクスはそういった。

「僕・・・ですか？」

「とりあえず邪魔するし。」

「ど・・・どうぞ。」

とりあえずリビングに案内して、お茶を出した。さっきからによいよしてるのがすごい気になる。

「で、僕に何の御用なんですか？」

「最近トリスがつめたいんよ。」

「トリスさんが？」

「俺が良いなーって思ったことも曖昧に頷くだけだし・・・それで、アオイなら一緒にやってくれると思ったんよ。」

「やるって何をですか？」

「これ一緒に着るし。」

そういつて取り出したのは、うん絶対男が着るような服じゃないよね。ピンクって、メンズにはあんまり使われないやつだね。おしやれな人でも着こなすの難しいって聞いたことあるよ？

「それ・・・レディース？」

「そうだし。」

「なんで持ってるんですか？」

「これマジ可愛くない？」

「うん、可愛いですね。女の子が着てたら可愛いですね。」

「そう思っし。だから持ってきたんよ。」

フェリクスさん話つながってません

！！こりゃトー

リスさんが冷たくなるというか・・・うん、呆れてものも言えなくなっただろうな。でもなぜ僕のところに来る！？

「フェリの弟ならわかってくれるって思ってたし・・・さ、早く着替えるし！」

「はい？え・・・着替えるって・・・ええええええ

！！！！？」

誰かマジ助けて・・・・・・・・・・。あ、口調がうつりかけてる・・・。

「無理って言うかいやです!! そういうのは女の人に頼んでください!!」

「女物だからって、女が着なきゃいけないってわけじゃないしー。」

「どこからその考えはくるんですか
！！！」

「さ、さっさと着るし！」

「いやあああああああああああああ！」

その後、帰ってきた兄ちゃんに可愛いと言われ、ルートさんはフェリクスさんを追いかけはじめ・・・その内にフェリクスさんはどこかに消えていった。そういえば、菊さんがやけに生き生きした顔して帰ったのはなんでだろう・・・。ありがとうございます・・・とまで言われたけど・・・。

そんなわけで、僕のクローゼットの奥には似つかわしくないピンクの服がしまわれているのだった。

いや、僕男の子なんで・・・ピンクはちょっと・・・（後書き）

何気にフェリクス初書きでした。

口調無茶苦茶なところはスルーしてください・・・はい・・・。

もう、行動自体が年齢制限。(前書き)

なんていうサブタイトル・・・
一応しもネタありませんから。存在自体が・・・ごもごも・・・な人
が出てくるだけですから！！

もう、行動自体が年齢制限。

バラってどこに咲くんですか？

庭とか、公園とかです！

はいそのとおり、したがって……

「そこにあるのはおかしいんじゃないんですかぁ！！！！！！？」
「え？なにが？」

はい、僕の目の前には股間にバラをはやしたフランシスさんがいます。なぜに？

「何しに来たんですか？公衆猥褻物陳列罪で逮捕してほしいんですか？警察呼びますよ。」

「ちょ……これいまはやり「嘘でしょうに！！」「ちょ……全否定！！？」

「お兄さんさ思っわけよ。」

「何がですか？」

「12月24日って、お兄さん何もできなかったんだよねラスト以外。」

「????何の話ですか……?」

「きにしなーいきにしなーい。」

気になる。すっごくきになる。12月24日もだけど、今フランシスさんが持つてるものもすっごく気になる。

「なんで、ねこ耳？」

「アオイ！君を見込んで来年は俺と一緒に楽しもうじゃないか！」
「だからなにを・・・」「このくそひげがあああああああ！！」
「ぎゃあああ！！」うわぁ・・・。」

アーサーさんが現れた。

アーサーさんの攻撃：助走という名の全力疾走からのとび蹴り。

フランススは99のダメージ。

フランススは倒れた。アーサーは経験値を手に入れた。アーサーはレベルが上がった。

「って・・・アーサーさん！？」

「ったく、アオイ！こんな奴になんか協力すんじゃねーぞ？」

「何に協力しちゃだめなんですか？」

「クリスマスだ！！」

「クリ・・・スマス・・・？」

それってあのサンタさんが来る日？ツリー飾ったり、ケーキ食べた
りするあの日？

「とにかく、このくそひびーーーーー」野郎は引き取らせてもら
うからな！それに、今後お前があれば巻き込まれないように、去年
のこいつがやったクリスマスの時の映像、お前にくれてやるから後
で見ろ！！べ・・・別に、お前のこと心配してるとかじゃないから
な！！お前が知れば止める側に回って、俺が被害にあうのがなくな
るって思ったただけだからな！！」

長いです・・・。

「はあ・・・じゃ、後で見てください。さようなら。」

「ぎゃああああー!! ちよつとアオイ君ーーーー!! お兄さん見捨てないでよー!!」

「その格好じゃなきゃ考えましたけど、無理です!!」

全裸に近い人を助けるのは、ちよつと気が引けました。ごめんなさい。アーサーさんにしかその役は無理だと思います。

遠ざかっていく年齢制限付きそんな存在をアオイはしばし見送っていた。

その後、アオイは見てしまった映像により、二週間夢にうなされたという・・・

もう、行動自体が年齢制限。（後書き）

すみません。申し訳ありません。ごめんなさい！

何書きたかったかわからない今回。アーサーにより、アオイのフライング化阻止されましたね。よかったよかった。

コーンってさ、途中で飽きてくるよね、え……僕だけ？（前書き）

暑いです……溶けるわぁ……

コーンってさ、途中で飽きてくるよね、え・・・僕だけ？

「う・・・うまあ・・・つべたいし・・・うまあ・・・
うまうまあ・・・。」

べ・・・別に壊れてないですよ。

只今兄ちゃん（二人）と一緒に近くのジェラート屋さんにいます。
本場のジェラートマジうま！でも・・・。

「カップないのがなあ・・・。」

「何言ってるの？これがいいんじゃない、ね、兄ちゃん。」

「そうだぞこのやるめ。」

「うつ・・・。」

だって・・・そりや僕もワッフルコーン好きだよ？でも・・・途中・
・半分くらい食べた位からってアイスもうないことが多いし、飽
きてくるじゃん？コーンってそんな味ないしさ。ちょっと甘いかな
ーってくらい？サクサク美味しいけど、けどさあ・・・やっぱ飽
きる。

「カップほしかった・・・。でも、おいしいからいいや。」

「おじさーん、もう一個おんなじの頂戴ー！」

「食いすぎだぞこのやるー。腹壊しても知らないからな！」

「ええーだっておいしいんだもんー。それに暑いしさあ・・・。そ
うだ、こんど菊の家でね、抹茶のジェラート食べさせてもらいに行
くけど、兄ちゃんとアオイも来るー？」

「抹茶！いくいく！！」

それに菊さんの家なら絶対にカップある！元日本人の僕が言うんだから間違いない！！それに何気に抹茶のアイスはうまうまだ！！

「俺も行くぞ。」

「じゃ、後で菊に言っておくねー！」

うぶ・・・あ、やっぱり飽きてきた・・・。

ワッフルコーン、おっきいんだもんなあ・・・。食べ応え十分？って感じ。フェリ兄ちゃんなんかもう三つ目だ。食べすぎでお腹壊してまたルートさんに怒られちゃうんだろっなあ・・・。

でも・・・おいしいもんね、あつついなか食べる冷たいものって。

ってことで、

「おじさん、僕にも同じのもう一個ください！」

ワッフルコーンなんか負けてたまるか！！

「はあゝ・・・・・・・・イタリアって最言だよね・・・・・・・・。うつま。うつま。」

コーンってさ、途中で飽きてくるよね、え・・・僕だけ？（後書き）

暑いから生まれた今回の話。

若干、黎兔の好み入ってますね。コーン苦手なんです。31でも絶対カップ。トリプルは絶対カップのほうがいいと思う。だってああ
ーーーー！！ってなるのいやですから・・・。

ジェラート食べなくなってきました・・・でも近くに店ないんですよえ・・・

バニラアイス・メイプルシロップぞえ

「う……うまあ……うまあ……ううゝ!!」

なんかこんなの前にもあったような……。この始まり方……。うん、なかった。うん、なかった! ジェラート食べてたとかそんなこと……。ないよ!! そこ、あったじゃんとか言わないで!!

でもね、今回は違うからね。普通の市販のバニラアイスだから!! 確かに普通のバニラアイスうまいよ。うまうまだよ!! オーパークアップが僕は好きだったな! 抹茶もチョコもおいしいんだもん! でも、バニラはやっぱ王道だし、おいしいに決まってるもん! しかも今日のは一味違うんだぞ!! あ……。アルフレッドさんの口調が……。やばいやばい……。

「そ……。そう言われると、僕も持ってきたかいたかなくなってるよ……。」

なんてつつって、マシューさんが持ってきてくれたメイプルが掛けであるんだもんねー!! まじ最高だよ。

「いいんですか? こんなにもらっちゃって。」

「うん、君のお兄さんに頼まれたからね。でも、留守なんだ。」

「すみません……。またふらふらと……。(どうせナンパだけど……)。」

「ううん、気にしないで。僕影薄いからさ……。」

「……。」

たしかに……。僕も初めて会ったときは気がつかなかったもんなあ。

「・・・今は解るんだけどね。でもほかのみんなは気がつかないみたいだし・・・うーん・・・」

「いつでもほしかったら言ってね。また持ってくるよ。」

「ありがとうございます！マシューさんも、うちにある物でほしいのあったら言ってください！兄ちゃんに言うておきます！」

「ありがとうございます。」

「あ、そだ。これ、兄ちゃんからマシューさんにつて。今日お誕生日ですよ！あとでパーティするんですよ！僕も行きますからね！！」

アオイが差し出したのは小さな一人で食べるにはちょうどいいくらいの大きさのケーキだった。

「わあ・・・覚えててくれてたんだね・・・。僕はそれだけでも幸せだよ。うん、是非来てね。多分アルフレッドがうるさいけど・・・。」

「あはは、楽しそうですね！」

マシュー、ハッピーバースデー

バニラアイス・メイプルシロップぞえ（後書き）

ということで、マシユー、ハピバ!!

んー・・・アルフレッドは・・・どうしましょ・・・
気分が乗ったら書きます。乗ったらです・・・あくまで・・・。

願い事は・・・（前書き）

七夕ですね！

皆さん願い事書きました？

私、ありすぎて短冊になんか書ききれないです

願い事は・・・

「兄ちゃん・・・これ・・・。」

家の庭にあつたのは青々した葉を茂らせた笹だった。イタリアにあるのは少し珍しい和の感じ。

「これねー、菊に貰ったんだ。」

「菊さん？・・・あ、今日七夕かー！」

すっかり忘れてたよ。イタリアにいるからなのか、日本独自？の文化って忘れがちだなあ・・・。

「そ。って、アオイ知ってたのー？ちよつとがっかり。」

「物知りでしょーっていいなかった？」

「うっ・・・ヴェエ・・・。はい、じゃこれ書こう！」

「立ち直り早っ！？あ・・・短冊もあるんだ。」

「そーだよー。七夕飾り？に必要なものは菊が一通りくれたんだよー。さ、書こう！ほかのみんなの短冊はもうもらってきたんだ。」

そう言つて彼は色とりどりの短冊を出した。確かにさまざま願いが書かれている。

「んー・・・願い事かあ・・・。」

「ヴェヴェヴェヴェ」

「兄ちゃん楽しそうだね。」

「まあねー！」

数分後。

「こんなもんかなあ・・・。」

「かけた？」

「うわっ・・・見ちゃだめ!!」

「えーなんでー？」

「いいの!で・・・兄ちゃんはなんて書いたの？」

「えーっとねーパスタいっぱい食べたいでしょー、それからかわいい女の子に会いたいでしょー、それからルートの訓練が厳しくならないように　でしょーあと・・・。」

「も・・・もういいよ・・・なんかいつもの兄ちゃんだよそれ・・・。」

日々願ってることをただまとめて書いてるだけだよ・・・。

「そういえば・・・ほかのみんなはなんて書いたのかな？」

「うーん・・・こういうのって何か見たくなるよね。」

「じゃ、これから。『俺の願い?そんなのきまつてるだろう!もちろん、ヒーローさ』『ヴェ?』」

うん、誰だかすぐわかつちゃうんですけど・・・。アルフレッドさんだね。この人も兄ちゃんと一緒か!!

「次は・・・料理がうまくなりますように。ベ・・・別に俺の料理がまずいとか・・・そんなわけないんだからな!!もう少し上達とかさらなる高みを目指してるだけだからな!!」『ヴェ?』

これもなんとなくっていうか・・・短冊内でツンデレ発動してる・・・!!?アーサーさん・・・素直に認めたほうが・・・げふんげふん・・・。

「えつとー」もう少し、奴がまじめに訓練を受けてだな．．．あと所構わず寝るのは勘弁してほしい、あと砂漠でパスタゆでたりとか．．．あと、すぐに救助要請出すのもやめてくれるといい．．．あと．．．（中略）．．．それから．．．（さらに中略）．．．これくらいだな。『ヴェ？』

兄ちゃん！！ルートさんだよこれ絶対！！てか、もう兄ちゃんに関する願いしかないよこれ！決めた。今度ルートさんに何かあげよう。極力ルートさんには迷惑かけないようにしよう。兄ちゃんもできるだけ僕が助けよう。うん。

「あ、これ兄ちゃんの字だ。『トマト食いたいぞこのやるー。』ヴェ。」

あつはははははは．．．．．なにこれ！？もうただの催促？トマトなら買ってあげるから兄ちゃん！もっと違う願いなかったの！？てか、まともな願いが無いよ！！」

「あー、このきれいな字は菊だね。『塩塩塩塩塩塩塩塩。はっ．．．いえ、世界平和でありますように。』いいこと言っねー菊。」

最初、どう考えても心の奥底の欲望が．．．。菊さん、塩って．．．。そりゃ僕も時々塩おむすびとか食べたくなるけど．．．控えてください。お願いします。

「さ、これみんな飾っちゃおう。」

「ヴェ？アオイのは？」

「うつ．．．あ！もうてっぺんに飾っちゃったから見れないね！さ、どんどん飾ろう！」

「えー・・・残念。ねえねえ教えてよー。」
「いーや！」

2人はワイワイしながら、笹を見事に飾って行ったのだった。

『いつまでもヴァルガス家三男でいられますように。なんてね。』

願い事は・・・（後書き）

ロヴィーノの願いはすみません。思いつきませんでした。だからト
マト。

西洋に七夕の文化・・・ないと勝手に思ってたのです。調べた
りしないのですよ。

兄ちゃんがっ・・・兄ちゃんがっ・・・(前書き)

最近、めっきりネタが浮かんでこないんです。

こんなくだらないネタしか・・・orz

け？あれ、なんか会ったらずくに泣きだして逃げたり白旗振ってる兄ちゃんの姿が見える……。あれえ……

「すつごくない？俺、アーサーに勝てたよ！」

「うん……。すごいね……。すごいよ……。……。」

なにがつて、ずるさがすごい。

やってたのはあれだよ、電気出す黄色いネズミとかが、赤と白のボールから出てきて戦って冒険するゲーム。夏に映画もやってるあれ。今年は二作品同時上映らしいね。うん、最近見に行つてなかったけど。主人公人間離れた運動神経してるけどね。

で、そのゲームノ通信対戦、シングルマッチをしてたらしいけど……兄ちゃんそれは……。

「なんで兄ちゃんのポ○モン。レベルが6体中4体が100なの？あとのも80とか……。弱くて65つて……。……ずるっ！！」

「え 菊がなんか裏技あるんですよつていつて、なんか力チ力チしてたけど……。。」

それだ。菊さー……。それはだめだからね……。！！よい子は真似しちゃいけないんだよの裏技だからね！僕もそれやってる友達と闘つて……。うん、結果は見えてたけどさあ！！

「兄ちゃん、勝ててよかったね……。。」

「うん、ね、アオイもやる？」

「僕これから掃除しなきゃいけないから遠慮するよ……。じゃ、ね。」

まあ、兄ちゃん喜んで幸せそうな顔満面だから……うん、もうこれ以上深くは言わないようにしよう。

兄ちゃんがっ・・・兄ちゃんがっ・・・（後書き）

やや黎兔の実体験も含んでたりするこの話。

どこらへんがって、レベル100が四体の相手と通信対戦ってあたりです。

はい、私その時レベル平均45くらいだったんでね・・・勝てるかあ！！

ちなみに新しいゴールドとシルバーは買ってないんですよねw
なんとなくですけど。

誕生日おめでとつとか、絶対に言ってなんかやらないんだからね!! (前書き)

いまさらですが・・・アオイ君のキャラがよくわかんないですねw

周りの個性あふれる人たちに振り回される苦労少年なんですけど、
作者が暴走させない限りはそんなつもりで書いてるんですけど・・・

・

誕生日おめでとつとか、絶対に言ってなんかやらないんだからね!!

また来たこの人………

しかも

なんで僕こんな格好してるのかなあ!?

「ヤホオ!久しぶり、元気だったー?」

「なんでそんなテンション高いんですか、久しぶりじゃないです、つい最近きましたよね、見てのとおり元気大暴落してますね。ということで、さようなら。」

「ちょ、ひどくない!?お兄さんにたいして酷すぎない!?お兄さん、アオイの機嫌損ねるようなこと、なんかした!?!」

しました。

したからいま、こんなテンション低いんじゃないんですか。

今また、家にフランスさんが来てしまってます。

僕、掃除終わって昼寝してたんだぞ!!

で、目が覚めたら目の前にフランシスさん。一気に目が覚めて、「不法侵入――！！！！」って叫んで平手打ちしたのは内緒のほうこうで……。今思えば背負い投げくらいやっとならばよかったかもっておもう。だって……。だって……。」

「なんでメイド服着てんの僕ー！？」

いやなんで着てるのかはわかる。フランシスさんが着せたにちがいない。フリッフリのオーソドックスなメイド服。ちよつとスカート丈短く無いですかぁ！？意味わからないんですけどー！！

「お兄さんが着せたからに決まってるしょ？」

案の定そうだといってるね。

「勝手に脱がしたんですか！？セクハラですよ！！うわーん兄ちゃんー！！お巡りさんー！！強制猥褻罪の犯人に襲われたぁー！！」

あれ……。そういえば……。そもそも……。

「なんで家にいるんですか？」

「お兄さん、今日誕生日じゃん？」

じゃんとか……。

「あー……。そうだったんですかー……。アルフレッドさんとかマシューさんとかの誕生日がインパクトありすぎてしりませんでし

た」

「！？いまのどこ 付ける必要ある！？」

「人間、開き直りも大事です！」

「どんな考えなのそれ。ま、いいか。さーメイドアオイ君！今日は一日付き合ってもらおうよ！」

「は？どこにですか！？」

「お兄さんの欲り・・・願望を叶えに世界中へ！！トリはアーサーっていうお決まりだからね！」

「はい？え・・・ちよっ・・・僕この格好で世界中行くのいやああああ！！！！」

こうして、変態フランスとメイドさんアオイのフランスの誕生
日記念企画は世界中をピンクに染めました

どのような企画だったかって・・・？うん、凄かったよ・・・。
なにがって・・・うん、いろいろ・・・。え・・・はぐらかすな
て・・・。菊さんとか、アルフレッドさんとか、ローデリヒさんと
かその他いろんな人たちが、あんな服や・・・そのたもろもろ・・・。
うう・・・。僕以上に悲惨な目にあってました。アーサーさんはま
だフランスさんおっかけてんのかな・・・あはははは・・・。も

う寝よ。

フランスの誕生日記念、『世界の国々の赤裸々写真集』好評発売中！

「って、そんなおちやだああ！！！！」

ちゃんちゃん

誕生日おめでとつとか、絶対に言ってなんかやらないんだからね!!（後書き）

「そういえば今日って誰かの誕生日だったっけー。」

ぺらぺら（ヘタリア三巻のキャラ紹介ページめくる音）

「ああ。フランスかぁ・・・うん、じゃなんか書こうかな。」

ってことで、今日一日で編み出した今回。

うん、ごめんなさい

反省の色見えてないって？フランス暴走させるのが楽しかったw
その後の話として、アオイのクローゼットにまた女の子向けの服が
増えたのは言うまでもないですねw（あのピンクの服以来ですけど
w）

アオイ君のメイドさん姿は皆様にお任せしますw

仕返しとかよくないってお母さんが言ってたぁ！！（前書き）

なんか前タイトルアオイ君ツンデレになってませんか？

ツンデレな設定ではないんですけど。

「作者がそうしたんでしょ！僕アーサーさんみたいじゃないよ！」

あ、アオイから眉毛と一緒にすんなって声が……

仕返しとかよくないってお母さんが言ってたあー！

「ごめんなさい！ごめんなさいごめんなさい……………」

あ、謝ってるのフェリ兄ちゃんじゃないよ。僕だよ……………！！

「ふはははははは……此处で会ったが百年目！いつぞやの恨みここで晴らしてやらあー！！」

「やだあ……………」

目がっ……緑の眼が怖いよ……………！！

緑の眼つてきれいだよ。怒ってない人は！ただいま地球外の何かという名のスコーンを持って、なぜかい飼ってるアーサーさんに追っかけられてます！前書きで、アーサーさんと一緒にすんなっていったから！？それ作者！それ作者だからね！

「それだけじゃねーよ！人んちトマトだらけにしゃがって！あと、ひげの誕生日ん時、あいつに手え貸したろ！！お礼に俺のスコーン食わせてやるよ……………」

「いやああああああ！！完全に日ごろの恨みを僕で晴らそうとしてるうつうつ！！」

そのもくもく黒い煙出してるのいやあああああ！！死んじやうよー！人生二度目の死期を迎えちゃうよー！！それまじかんべん

してえ!!

「逃がすかよ、ほあたっ!!」

「ちょ・・・わあああああ!!真昼間から魔法とか使っちゃだめ
————!!」

て言うか危険です!危険すぎる————!!

「ごめんなさい!!もうしないんでゆるしてください!!でも
似合ってたと思います・・・、アーサーさんの〇〇〇とぴー
————とかって・・・いぎゃああああ!!」

「似合ってるとかうれしくねーんだよ!今日はにがさねーからなあ
!!」

その後、僕はルートさんの家に逃げ込むまでアーサーさんに追われ
続けましたとさ。

ぐすっ・・・アーサーさん怖いよ・・・。

仕返しとかよくないってお母さんが言ってたあ！！（後書き）

なんとなく今までの話を読みなおしてアーサー不憫だからこりゃ怒るなっと思って書いてみました。

グダグダですね。アオイ君お疲れ様ですw

ため息つきたいときもある（前書き）

最近、真面目な話しにならないんですよこれがw

まあコメディイですから良いんですけどね。

ため息つきたいときもある

「はぁ・・・・・・・・・・・・・・・・」

どうしょっ！珍しいもの見ちゃった。兄ちゃんが、フェリ兄ちゃんがため息ついてる！

いやだつてさ、いつもため息つかせる側の兄ちゃんがだよ？悩みなんか存在してなさそうな兄ちゃんがだよ？あ、ナンパ失敗した後とかルートさんに怒られた後とかならあるけど今日はそんなことなかった。しかも今は朝食の時間。フェリ兄ちゃんの好きな Pasta だ。まさか・・・僕特製の Pasta が嫌なの？それでため息なんか・・・そりゃちよつとアルデンテじゃないかもしれないけど・・・やつぱイタリア人でそういうのしっかりしてなきゃだめなのかなあ。

「ご・・・ごめんね兄ちゃん。いやなら無理して食べなくて良いからね！今度はちゃんとアルデンテになるように頑張るから・・・」

「
「ヴェ？なんで謝ってるのアオイ。」

なんですと？

「え・・・僕の Pasta 食べたくなくて、それでため息ついたんでしょ？」

「そんなことないよー。アオイの Pasta 美味しいよ。アルデンテはちよつと惜しいけど、でも美味しいからね。」

「じゃ、なんでため息ついてたの？」

「ヴェ・・・それがさ、よくわかんないんだよ。」

「なにが？」

「どうやって桃太郎って桃に入ったの？」

・・・・・・・・・・は？

「赤ちゃんが桃の中にはいれないでしょ？それに中って酸素あつたのかなあ。川からながれてくるときくるくる回って痛くなかつたのかなあ？」

この人は・・・・・・・・この人はっ！！！！

「兄ちゃん・・・・・・・・それはきつと心配いらないよ。無事生まれて鬼まで倒したんだし・・・・・・・・。ていうか、なんで兄ちゃんが桃太郎なんて知ってるの？」

「菊の家に行った時に読んでもらった。」

読み聞かせ・・・・。菊さんの家って幼稚園か？でもなんか似合う。

・あれ・・・・兄ちゃんが菊さんのいえ行つたの先週だった気が・・・・

「今の今まで考えることなの？・・・なんかつかれた・・・もうシエスタ・・・じゃなくて、ふて寝してやるう！」

改めて兄ちゃんがよく解らなくなりました、ちゃんちゃん

ため息つきたいときもある（後書き）

ため息が一番似合うのはルートだと思うw

夏と言ったら氷食べよ！（前書き）

すぐ存在を忘れてしまつて更新しなくなつてますね。

アオイ君は夏が大好きなようで、夏バテしないのかな？つて聞きたくなるほど元気いいですね。

夏と言ったら氷食べよ！

「夏ですね。私の家もずいぶん蒸し暑くなりました。」

「菊の家、サウナみたいだねー。でもかき氷おいしー。」

「お前それ何杯目だ。腹壊しても知らねーぞ、コノヤロー。」

はい。僕ら三兄弟はいま菊さんの家にお邪魔してます。というかかき氷食べに来たのが半分の理由だったり？それにしてもやっぱり日本の夏ってあついなあ・・・。

で。『で』ですよ皆さん！？

実はここに僕ら以外にもお客さんがいるんだよ。そのお客さんっていうのが・・・

「知らないんだぜ？宇治金時の起源は俺なんだぜ！」

「そんなわけないネ！菊さんに決まってるヨ！」

「お前は頭悪いから知らないだけなんだぜ！それに菊の起源も俺なんだぜ！」

「んなわけ無い的な？」

「勇洙さん、座って食べて下さいよ。あちこちあんこが・・・。」

なんだろうね、この状況！カオスというか……。そう、お客さんっていうのは同じく遊びに来てた亜細亜のあの三人。王さんは珍しいくないけど。

「へえー、菊の起源で勇洙だったんだー。」

兄ちゃん！（。。）

「兄ちゃん・・・違うと思うよ。菊さんのほうが年上だし・・・。」

「あ、そっかー。」

「そうある！」

ぴしゃーんっ！！！！ 襖が開いた音

「菊の起源はたとえ地がひっくり返っても勇洙なんかじゃないあるよ！！！！！」

「王さん！？」

「兄貴来ちゃったんだぜー。」

「老師^{せんせ}遅かったネ。」

「襖は静かに開けてくださいよ・・・。」

「先生のぶんのかき氷食べちゃった的な？あ、勇洙が。」

「香ーーーー！！！！！」

あ・・・なんかやばい気がする。とりあえずそう感じ取った僕は、巻き込まれそうな兄達を縁側に引きずって強制退去させる。ちよつと前からしずかだなおもったら・・・シエスタしてるなんてえ・・・。

そして僕らはとりあえず縁側に避難。そのよこには同じように避難してきた香君、湾ちゃん、菊さんの姿。

みなさん、助ける気も止める気も無いんですね。

ま、僕も無いけど

夏と言ったら氷食べよ！（後書き）

かき氷、皆さんはなにが好きですか一番。

私はまあ練乳がかつてたら何でもいいんですが、あえてみぞれ（透明なのかけたやつ）が好きだっていうwスーパーで売ってる練乳みぞれとかさいこうw

いえ、もはや冷たいものなら最近よくなってきました。
あ、なにげに次に続いたりします。

氷食べてるのに熱くなってるのはなんでなの!?

じわりじわり

硝子の器の中の

色とりどりの氷が溶けてく・・・

夏の暑さのせいで

否

「だいたい、お前と菊じゃ歳が十も百も万も億も違うある!!!」

「私あなたの中でいくつかの設定ですか。」

「菊が歴史改ざんしたに決まってるだぜ!!」

「菊さんがそんなことするわけないネ!」

この人達の熱気によって・・・

固体は液体と化していく

それをぼくはただみてるだけ・・・

ってなんで詩モドキみたいになってるの！？そしてなんで香君以外みんなあれに参加してるんですか！！なんで兄ちゃん達はこの状況でシエスタできるの！？・・・・・・はあっ・・・・・・はあっ・・・・・・（＊、＊）＝3

「相変わらず懲りないのな？」

「よくこんな状況で氷食べられるね。止めなくて良いの？」

「止められるなら止めてる的な。アオイこそ止めるの慣れてそう的な？」

「慣れてないって・・・・。」

「しかも！菊に頼んでた私のイチゴ練乳とアイス乗せかき氷食ったあるな！！」

王さんのやけに豪華だなあ・・・
僕も食べたい・・・

じゃなくて・・・

「あの・・・皆さんかき氷、溶けちゃいますよ？」

（。。。）×4

「菊、もう一杯作ってくれある！」

「俺も仕方ないけどもう一杯食ってやるから作るんだぜ！！」

「あんた、どんだけ食べる気なの！？菊さんの家の氷食べ尽くす気

! ?
L

「なっ！？それは私の仕事ある！お前ごときがんなことしないでいいある！！」

「先生、それなんか違うつすよ?」

「こ……氷ならまだありますから……。」

なんでだろ・・・氷食べてるのに

暑いや・
・
・
・

あはは
・
・
・
・

ZZZZZZZZZZ

だからなんでこの状況で寝られるの！兄ちゃん！！？

氷食べてるのに熱くなってるのはなんでなの！？（後書き）

ヴァルガス家、長男・次男が空気になっててすみません。

アジア組は書いててやっぱり楽しいですw

わんわん！！わんわん！！（前書き）

お久しぶりです。

若干アオイ君を放置してました

「ひどいよ、それ。どーせ新しいの考えてるんでしょ？」

うつ・・・そんなこと言うとフランス呼んじゃうぞ

「やめっ・・・あの人なんかわかんないけど、苦手だぁ！！ロヴィーノ兄ちゃんの気持ちがわかるぅ！！」

さ、じゃアオイ君の日常どーぞ！

「無視しないでえ！！」

わんわん!!わんわん!!

しろくてね、ちっこくてね、ふわふわでね、もふもふでね・・・

「かわいい——————!!!!!!」
「わんわん!!」

何この生き物!!かわいいんですけど!!

洗濯物を終えて、空っぽになったかごを携え、家に入ろうとしていた。そんなアオイの視界にそれは映り込んだ。庭の片隅、ちよつとした花壇のレンガのところで丸くなってるその体。きよろきよろとあたりを見回してるけど・・・どうしたのかな・・・?迷子?

そこにいたのは真っ白なワンちゃん。ゆっくり頭に手を伸ばして触れてみた。うん、期待を裏切らないその手触り。はわ・・・ぎゅってしたいよ。していいかな・・・だめかな?

「よいしょ・・・あ、かるーい。ね、君はどこの子?ここらへんじや見ないね・・・遠くから来たの?」

って・・・犬に言葉がわかるわけ・・・。

「わんわん!!」

首縦に振ったー!!?つ・・・通じたのかな。

「飼い主さん・・・いるよね・・・。」

これにも吠えてうなづく。そか・・・いるんだ。ちよつと残念・・・でも・・・。

「なら飼い主さん探さないかね・・・。んー・・・でも近所でこんな犬見たことないし・・・あ、ロヴィーノにいちゃーん!!」

そこへ運よく？ナイスタイミングで現れたロヴィーノ兄ちゃん。今日は朝からアントーニヨさんの家に仕事の書類置きにいつてたんだよね。

「そんなとこで何してんだこのやろ。つてなんだその犬？」

「やつぱ兄ちゃんも知らない？迷子みたいなんだよね・・・。」

「うちの家の犬じゃねーな。ほかの国から来たんじゃないのか？」

「そんな遠くから？」

「こんなちっせーけど、な。」

「んー・・・じゃ、僕この子の飼い主さん探ししてくるよ。」

「世界中をか？」

「うん。誰か知ってそうな感じの人に聞いてみようかなって。動物好きそうな人とかさ。まずはじめにルートさんのところに行ってくるね。」

「じゃガイモ野郎のとこか・・・。」

というわけで、ちびっこワンちゃんをピクニックなんかに使つかごに入れ、僕は一路ルートさんの家へと向かった。

わんわん!! わんわん!! (後書き)

わんわん! 編。(それでいいんだろうか・・・)

さて、誰のワンちゃんでしょう・・・わかる人にはわかりますよね・
・

わんわん!!わんわん!!ルートさんだわん!!(前書き)

もう題名ふざけてるw

でも直さないw

わんわん！！わんわん！！ルートさんちだわん！

「ルートさん、こんにちわー！おじゃましまーす！」

不法侵入じゃないよ？ルートさんしゃべってないけどいるからね？で、招き入れてもらって僕は名も知らぬもふもふワンちゃんとともにリビングに入れてもらいました！

「どうしたんだその犬。フェリシアーノが飼い始めたのか？」

「いえ・・・どうもこの子迷子みたいなんですよ。でもうちの近所の犬じゃないし・・・で、誰の犬かなーって飼い主さん探ししてるんですで・・・。そういうということは、ルートさんの犬でもないんですね。」

「そうだな。あいにくうちは大型犬が多いな。兄さんも犬は飼ってないし・・・。」

「そーですか・・・。」

あう・・・ちがったか。ルートさんの家って犬いっぱいいるからそうかなーって思ったけど・・・違ったか。そうか、もったかわい犬を飼ってるような人のところ行かなきゃだめか！何でルートさんの家なんか来ちゃったんだ僕！！

「だが・・・その犬どこかで見た気が・・・。」

「ど・・・どこですか！！！」

「いや・・・それがだいぶ前のことだしな・・・。すまんが思い出せないな。」

「そーですか・・・。じゃ、ワンちゃん勝手そーな人で誰か心当たりありませんか！」

「そうだな・・・たいがいのやつは飼ってるんじゃないのか？本田のうちにいたな。」

菊さんか……。確かに動物とか好きそう……。縁側で頭なでてまどろんでる姿が浮かんできちゃったよ。

「わかりました！僕今から菊さんの家に行くので、お邪魔しました！！」

「あ……あ……。気をつけてな。」

「はい！またゆっくり兄ちゃんとお邪魔させてもらいます！！では！！」

僕はワンちゃんとともにルートさんの家を飛び出した。

「そういえば・・・フェリシアーノのやつ、どこにいった？とづくに時間は過ぎてるんだが・・・あれほど時間厳守、書類は忘れるなと言っておいたのに・・・はあ・・・。」

家の中でルートさんが何回目かわからないため息をついているのは知らないよ

さーって、このワンちゃんの飼い主さんですか――――

わんわん！！わんわん！！ルートさんちだわん！（後書き）

ルートの家にこんな可愛いもふもふワンちゃんがいるわけがないだ
ろうに！

さー次は菊の家だぞー！アオイ君頑張ってねー

わんわん・・・ってもういいよねこれ。菊さんち来たよ！（前書き）

うわぁ・・・素で放置してた。

アオイごめんね！読者の皆様すみません。

ネタがないです。菊の家になんでしたんだろう・・・。好きだからだね。

ピンポン！

しーん…………

「留守……かなあ……。」

「自分、菊さんに何か用なん？」

「え……。？」

振り向くとそこにたこ焼き片手に持った、少年……。だよね、僕とそんな背変わんないからがいた。口調からして関西の人？キャップを後ろ向きにしてかぶってて、どこかの学生服来てる。

「あの……。そうなんですけど……。」

「菊さんなら今おらんよ？」

「ええ！？あの、どこ行っただかわかりますか？」

「ん……。あんま一般人にしゃべったらあかん言われてんやけど……。」

「僕、フェリシアーノ・ヴァルガスと、ロヴィーノヴァルガスの弟です！」

「ああ！自分がえ……。っとたしか、アオイやっただけ？じゃ、ええんかな。菊さんなら今、イヴァンさんの家行ってるで？」

「い……。イヴァンさん！？」

何であの人の家！？

「日本刀持参でな。すっごい笑顔やったんだけど・・・なんかえらい怖かったんや・・・。」

しかも・・・ただならぬ雰囲気！うわーん帰りたいよぉ！！でも・・・でもこのワンちゃんの飼い主さんの情報が・・・うわーん、にいちやーん！！

「わかりました、教えてくださってありがとうございます！じゃ、さよなら！！」

ええい！ぼくも男だ。イヴァンさんの家でも何でも行ってやるうじやないかぁ！！

僕はたこ焼き少年（大阪さん）にさよならをつげ、一路あくm・・・じゃなくてイヴァンさんの家に向かった！！

わんわん・・・ってもういいよねこれ。菊さんち来たよ！（後書き）

男らしいよアオイ君！

読者の皆さまからはかわいって言われてるけど！

「え・・・ぼく男だよ？かわいいの？むむむ・・・わかんないよ。」

┐

さて次はなんと菊じゃなくてイヴァン現る！？

そしていきなり修羅場？

アオイは無事もふもふワンちゃんの飼い主さんを見つけられるのか！！

です！

イヴァンさんちで大乱闘!!?(前書き)

また放置してましたね。三日間ですけど。

やる気の違いつて奴ではないと思うんですが・・・
この小説は息抜き程度に書いてるみたいですねw

イヴァンさんちで大乱闘!!？

うっわぁ・・・・・・・・・・

がきいん

しゅばばばばばばばば

どうかぁ

ん!!

ばきっどかっぱ

!!

「二人とも強いー・・・じゃなくて・・・どどどっしよう!!止
めなきゃだけど、そんなことしたらもれなく病院へGO!だし・・・
。でも止めないとどちらか・・・ていうかどっちも病院へGOにな
りそう・・・」。誰か助けてください・・・!!」

「あれえ？そこにいるのはアオイ君じゃないかな？」

「あら、アオイ君。こんにちわ。こんな変な所にどうしたんですか？」

さりげなく菊さんここを変って言ったよね。ほらイヴァンさんなんか、夏なのに冬將軍背後に見えるよ。怖いよ……。

「こ……こんにちわ……。あの……菊さんに御用があるんですけど……やっぱりお取り込み中見たいなので失礼します……。出直してきます。」

「構いませんよ。それに、なにもけんかしていたわけではないですしね。」

「え……。違うんですか？」

どう見ても大乱闘してるようにしか見えなかったんだけどな……

「イヴァンさんの水道管が変な風に曲がってしまったそうなので、私が叩いてまっすぐにしようと。」

「そうそう。ほら、もう元通りでしょ？菊君ありがとうね。」

「いえいえ。で、アオイ君私に何か御用で？」

「あ、はい……。（もういいや。なにもつつこまなくてもいいや。菊さんがいっていうんだからいいんだ）あの、この子の飼い主さん誰だか知りませんか？」

かぱつと、かごのふたを開けて、迷子のワンちゃんを見せる。菊さんとその後ろから見ていたイヴァンさんはそのワンちゃんを見て「あ」と声をあげたのだ。

でっちらっいに飼い主さんまでたどり着いたようだ！

イヴァンさんちで大乱闘!!? (後書き)

次回は飼い主さん登場ですかね。

さて誰でしょう。って、わかりますよね。え、わからないから早く書けて?

次回更新は・・・未定です。明日か、あさってか・・・それ以上?

お楽しみに〜!

飼い主さんみつけた!! (前書き)

これで迷子のワンワン編wは終わりですね。最後のオチはいみわかんないですよ。

飼い主さんみつけた！！

「もー、どこ行ってたの？心配したよー！」

「わんわん！！」

うわーあんなに尻尾振って喜んでる！やっぱり飼い主さんのところが一番だよな。

「アオイ君！はなたまご連れて来てくれてありがとうー！」

「テイノさんのとこのワンちゃんだったんですね。よかった、飼い主さん見つけられて。」

そう、あのワンちゃんの飼い主さんはテイノさんでした。名前ははなたまご……。僕はべつにだれがどんな名前つけても自由だと思うよ！

「テイノさん。じゃ、僕はこれで帰ります。」

「うん。ほんとにありがとうー！！また遊び来てね！」

「はい！！・・・あああああ！！！！」

忘れてた。

アオイは目にも留まらぬ速さ　？で一目散に駆け出した。

「兄ちゃん（フェリシアーノ）からSOS来てたんだった！！兄ち

やんどー！……！」

その頃のフェリシアーノ。

「ヴェ……ヴェ……アーサーのご飯まずいよ……ぐすつ……
・アオイまだ……かなあつ……。」

アオイがフェリシアーノ救出達成まであと1時間。

フェリシアーノはそれまで未確認物体……というなの某眉毛が作
ったらしいスコーンみたいなものに堪えられるのか？

次回に続く！

「続かねーよ、バカア！！！！つか俺のスコーンがなんだとコノヤロ
ー！！！！」

「アン○ーンチ！ならぬアオイパーンチ！！！」
「フゴオッ！！！！」

正義の味方、アオイは悪者アーサーから見事囚われのヒロイン・・・
・なわけない捕まった兄を無事助けたのでした！！

「んだこのオチ！！！！」

眉毛不憫オチw

飼い主さんみーつけた!! (後書き)

アオイは意外と強い子なものでした!ちゃんちゃん

みんなこれ好き？（前書き）

ちなみに私はよくわかんないです。

嫌いではない。けど、進んでそれに関わろうとは思いたくないですね。

・
・

関わって後悔しまくるんです私は・・・

「大丈夫かい？」

「うげえ．．．きもちわるう．．．。」

「あれくらいまだまだなんだぞ！レベルで言つと2くらいかな．．．」

「2!？」

あれで2!？菊さんの家なら10くらいだよ!!

「つてことでレベル上げてGO!なんだぞ」

「いやだあ!! 帰ります 返してください」

「!!!!」

あがつてー、急降下!!びゅんびゅん．．．しゅばばばばばつ．．．
．．．グルングルン．．．ゴオオオオ．．．

あは．．．

[illegible]

うん、もう乗りたくない！

「そうだ、ジェットコースター乗ろう！」

「そんな京都行こうみたいに言わないでください！いいいい！いや、実際京都もそんな気軽に行けるようなところじゃないですけど！！もうやめましょうよ！！あっちのもつと怖くなさそうなの……」。

「そんなのここ来た意味ないじゃないか。このスリルがたまんないんだぞ！！てことで、レッツゴー！！」

何か・・・若いね・・・。僕15だけどさ。アルフレッドさんの
 ほうが年下みたいにはしゃいじゃって・・・。アルフレッドさん今
 いくつ？ってくらいだよ・・・。あは・・・。

その日の夜。ジェットコースターに乗り続ける夢を見てアオイがうなされたのは言うまでもないw

みんなこれ好き？（後書き）

アオイは絶叫系苦手ですね。

でも、お化け屋敷はむしろ好き。なので仕返しにお化け屋敷に入りました。

何で書いたかよくわかんない今回。

アルフレッド出したかったかもしれません。アーサーとフランシス出しゃばってるので。ロヴィーノの出番少ないので、増やしたいです。でもきつと親分がおまけで付いてくるんでしょうけど・・・

・関西弁・・・難しいのに・・・。

夏終わると増える！！（前書き）

あ・・・

ネタがないw

ほんとです。今回は少し逃げてます。

何からって・・・もうなにかだろうねw

リク募集とかしようかしら・・・うーん・・・

一週間まじめに考えます。

夏終わると増える！！

「う．．．わあ．．．え．．．うそだあ．．．。」

太っちゃった

只今アオイ君は体重計の上です。表示されている数値は．．．内緒 いやあ．．別に女の子じゃないしね、体重明かしてもいいけどね。ていうか、もう登場人物紹介的などに載ってたよね。いや．．でも今はあれよりも増えた．．．。

「そんなばかな．．だつて．．そんな食べる量変わってないのに．．．なんでなんで!?」

そーいえばよく、夏休みとか終わるとなぜか体重増えてるんだよね．．。うー．．．遺伝的な何か?それとも．．．。

「おい、そんなとこで何やってんだこのやロー。」

「あ、ロヴィーノ兄ちゃんだ。体重量つたんだよ。そしたらね、太ってたんだ。」

「（じ．．．）食いすぎたんじゃねーのか?」

「そんなことないと思うけどなあ．．。兄ちゃんたちとおんなじの食べてたよ?間食は少なかったくらいだからむしろ増えるなんて．．．。」

がーんがーん……。この年にしておデブになっちゃうよあ……。着れる服なくなっちゃうよあ……。

「つて……。なんで兄ちゃん太らないの？」

「俺？……。さーな。」

「ええ……。。」

さーなつて……。そんなあ……。でも……。不思議だよね。食べては寝て、食べては寝てしてたのに……。なんで太んないの？

「アントーニヨんといると、トマトしかくわねーからかも……。」

「ええっ！？」

トマトだけ！？

「トマトだけっていつてもトマト料理だぞこのやろー。あいつ何かしら考えて作るっぽいから、太んねーんじゃないのか……？」

「そ……。そうなんだ……。そか……。やっぱそういうの大事だもんね。よーっし！今日からカロリー管理メニュー作るぞ！！目指せマイナス５キロ！！」

「お前……。どれだけ太ったんだ？」

あははははは……

みんなも気をつけてね

！！

夏終わると増える！！（後書き）

何だこの話は！！

面白み0（それはいつも）意味0（そうだね）

わけわからん！！誰かヘルプミー！！

うう・・・更新停止の危機・・・

よし、誰か暴走させよう。フランスあたり・・・

じゃあ、明日来てくれるかな？（前書き）

あーネタないです。

どこかに落ちてませんか？ないですかorz

ネタ思いつかないと無理やり完結させようかとも思っんですが・・・でも

ギャグ書くの良い息抜きになるんですね。

一週間まじめに考えようとか前回言ってた気がしますけど（確かに言ってた）

なんも考え尽きませんでした！

じゃあ、明日来てくれるかな？

どっかのファミレス。のつもり。ドリンクバーは仕方がないから私のおごりだ！

黎「はい、なにも思いつかなかった黎^{バカ}兔です！」（以下黎）
アオイ「……って、はじめまして？アオイ＝ヴァルガスです？」（以下ア）

黎「いやいや、はじめましてじゃないよ。私が君の親だw」

ア「で、なんでぼくあなたとファミレスにいるんですか？」

黎「まあ、好きな物飲みたまえ。」

ア「じゃ、持ってくる。」

ア「……で？今回はなんなんですか？いつもだったらごたごたの僕の日常でしょ？今回もそうじゃないの？」

黎「……さて、何の話でしょ？いいんですよ？フランス暴走させても。そのほうがきつとアクセスもアップするだろうし……。」

ア「ヤダ……それはやだあー！」

黎「で、今回は質問コーナーにしようと思います。って言っても、私が勝手に考えた質問なので読者の皆様から頂いた質問はありません。というか質問もらってないのじゃないのは当たり前です。」

ア「あのお昼の電話でお友達呼ぶコーナーみたいなもの？」

黎「あれはトークでしょ。まあそんな感じで。よし、私は張り切ってグラサンマイクでもやろう。」

ア「失礼だよそれ。」

Q1：アオイが一番仲いいのは？

ア「一番仲いいの？んー・・・兄ちゃんたちはもちろんだし、兄ちゃんたちつながりでルートさんとか、菊さん、アントーニヨさんとかとも仲いいよ。基本枢軸？の人たちとは仲良しかな。」

黎「連合はだめか！」

ア「だめっていうか・・・なんか苦手だよ。王さんは普通。イヴァンさんは・・・ねえ・・・。アーサーさんは兄ちゃんいじめるし、怖いし、仕返ししてくるし・・・。アルフレッドさんにはついてけない・・・元気ありすぎだし・・・。フランスさんは・・・言わなくてもわかるでしょ？」

黎「それもそうだ。うーじゃ、今後連合の出番を増やすか。」

ア「なんで！？」

Q2：アオイって意外と強い？

黎「結構強い子だよね。」

ア「そうかな？一応中学の時は空手やってたけどね。」

黎「空手が・・・剣道にしない？」

ア「しないって・・・考えたのそっちでしょ？」

黎「そりゃそうだ。作中で必殺技も出たしね。」

ア「今思ってたけど・・・アオイパーンチ！ってさ・・・パクリ・・・。」

黎「偉大なパンの中にあんこが入ったヒーロー様の必殺技を伝授されたんだよ。」

ア「あったことないし・・・というか、そのヒーローのアニメ見たことないんでしょ？」

黎「失敬な！OPは見た！」

ア「それ見たって言わないよ。」

Q3：なんでアオイはヴァルガス家に転生した？

ア「あ、それ僕も知りたい。」

黎「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ア「？」

黎「そんなに知りたい？そんなに知りたい？そんなに知りたい？そんなに知りたい？そんなに知りたい？そんなに知りたい？」

ア「な・・・・・・・・なにこわいよぉ！？」

～強制終了～

黎「やめた！なんかこれ読者の方々を裏切ってるわ！」

ア「いまさら！？」

黎「ほんとに申し訳ありません！次回までしっかりアオイをいじめる・・・・・・・・アオイを活躍させるネタ考えときます！今回はほんとに・・・・後悔ばかりです！！」

ア「今さりげなくいじめるって言わなかった？え？どゆこと？」

黎「やだなぁ・・・・・・・・15で幻聴聞こえるとかw」

ア「ちぎゃああああ！！」

黎「最終手段、フランスス乱心にならぬよう善処します。」

ア「善処してね！」

じゃあ、明日来てくれるかな？（後書き）

此処まで見てくださった方に心から感謝を。

次は必ずヘタリアキャラを出せるよう頑張ります。
さーって、どうやってアオイをいじめようかな
ア「やっぱ言ってるじゃんかあ！！」

僕、今どきの子だからわかんないよ！（前書き）

リクエストをいただいたので今週は何とかなりました！
あと書き方少し変えてみました。

読みやすい・読みにくいありましたらお知らせください。

僕、今どきの子だからわかんないよ！

晴れ渡った空は、綺麗な青に染まっていた。白い雲がゆつくりと漂っている。空高くに見えるあの黒い点は、渡り鳥だろうか。だがその広大な景色も今は小さな額縁の様なものの中で見えることは叶わない。アオイ―ヴァルガスは大きくそして深く息を吐いた。

「もう……3日も経ってるのに……」

ただ何もせずにここにいたわけではない。だから少し期待もあった。のだから、今はそれすら薄れてしまった。

アオイが落とし穴にはまったのが3日前の事だった。まさかこの現代に、落とし穴と呼ばれる代物を実際に見るなんて事があるとはアオイですら思わない。掘る場所など現代には数えるほどしかないからである。

だが、アオイははまってしまった。今思い返しても一生の不覚である。だがはまってしまった当時は、打ち所が悪かったのか、そのまま気を失ってしまったので、起きた時は頭を抱えて後悔した。まさか、自分がこんな失態を侵すなんておもいもしなかったのだからだ。これが兄二人ならまだわかる。なのに……まさか自分がはまってしまうとは。

「だってあんな落とし穴なんて、いまだきの子供でもやらない古い罠使う幼稚な人がいたなんてさあ……。」

まあ、その幼稚な人は知っている。気を失う前にその姿をアオイはしっかりと目撃していた。そしてそれは見知った顔だった。

「あーでもあれだね、その人の名前を公表するのはその人の人権侵

害とかに繋がっちゃうだろうから、やめとこう。匿名で……僕がただ名をつけよう。えーっと……似^{えせ}非紳士？似非エロインチキ魔術元ヤン？んー……パンクまゆ毛？あと何があるかなあ……」

「おいてめえ……。誰のこと言ってるんだ？」

「やだなあ、間違っても今日の前にいる地球外物体製造似非紳士エロまゆ毛のことなんか言ってるじゃないですよ」

「今はつきり目の前にいるって言っただなあ？それに何か増やしただらー！」

「あ……」

そう、僕を落とし穴にはめたのはアーサーさんです。ひどいよね。

「というか、なぜ僕を？」

「H A H A H A H A H A H A H A H A それはおれが答えるんだぞ！」

「……いたんですかメタボ」

「ちょ……俺はメタボなんかじゃないんだぞ！！俺達の目的はズバリ、悪の枢軸を倒すことにある！で、その第一歩として何か弱そうなフェリシアーノからつてなってるんだぞ！でも、フェリシアーノを捕まえても結局君が助けるじゃないか！」

「……それはまあ、助けを求められれば助けますよ。兄弟ですから」

「だから、まずお前をとっ捕まえちまえばいいって考えになったんだよ」

「単純ですね」

「単純なのが一番いいだろう！」

「そういうものですか……さて、そろそろ来るかな……」

「な……なにがだ？」

「僕の救世主です」

「「は？」」

その時だった。牢屋のある空間に爆音とともに煙が立ち込めた。

僕、今どきの子だからわかんないよ！（後書き）

というわけで、続く。

持つべきものは友達なんだよわかった？まゆ毛w

「うひゃああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

まあ、突然爆音がしたら驚くよね。驚くけどさ……

「面倒見てたアルフレッドさんの後ろに隠れるなんて……」

アオイは年に似合わない冷たい視線を送った。アルフレッドさんは驚きはしたもののそんなに変わることなくその場にいたのに、アーサーさんったら変な絶叫を上げてアルフレッドさんの後ろに隠れたんだよ。どっちが年上なんだろうね。何とも大人げないよね。ま、うちの兄ちゃんたちも……うん、やめところ。きりがないね。どっちもどっちって結論むなしいからね！

煙が収まり始めたころ天井から誰かが降ってきた。スタンツと見事に着地したその人物は黒髪短髪のチャイナ服青年だった。

「まだアーサーさんビビってるてきな？ぷっ……マジうけるんすけどw写メ撮っていいっすか？」

「て…テメエは……」

「香君久しぶりだねー！」

「アオイ捕まえるとか何考えてるんすか？今度はシヨタに目覚めたとかマジあり得ないんすけど」

むむ……僕はシヨタっ子じゃないよ？何言ってるのかな香君は。ぷんぷん！！怒っちゃうぞ

「んなわけあるかぁ！！れっきとした作戦に決まってるだろうが！！」

「そうだぞ！ていうか、なんで君がここに来るんだい？」

「アオイと午後遊ぶ約束してたんすよ。でもなかなか来ないから探し回って、でも見つからない的な？だから、菊さんに頼んでいろいろ調べてもらって、衛星の映像とかGPSだとかで此処にアオイがいるってつきとめたんっす。」

「菊か……」

「菊そーいうの得意なんだぞ！」

「つーことで、goodbye！」

そーいうと香君は持っていた残りの爆薬で檻を破壊し……僕を見事助けてくれました！やっぱ友達だよねー。

ま、アーサーさんにはわかんないだろうけど、ぷぷっw

「んだとこのやろうー！！つかまたこの終わり方かよー！！」

「もう諦める的な？」

「香君、早くゲームやりに行こう！」

「OK！」

こうして僕は無事救出されました

持つべきものは友達なんだよかった？まゆ毛w（後書き）

ビビりアーサー。不憫アーサー。

やっぱりこういう役回りなんですよね。アーサーw

普が出てこないぶんアーサーの不憫が目立つ目立つw
頑張れアーサー！

昔の思い出追いかけて……その1（前書き）

さて、最近ふざけてばっかですねこの話。

コメディーなんでもいいんですけど。あとアーサーファンに怒られそうなアーサーの扱い……これでいいんだろうか……と考える日々です。

多分、アオイはアーサーをからかうのが楽しくて仕方ないんですよ。

今に仕返しされないかが心配です……。

あ、今回はアーサーは出てきません。

昔の思い出追いかけて……その1

「うわーん！」

「ちぎっ！全然揃わねーぞコノヤロー！！」

「はい、次アオイの番やで！」

「ババはフェリ兄ちゃんだから「ヴェー！？なんでわかったの！？」

……顔に出たよ」

「ええー……消えるかなあ？」

「そういう意味ちゃうで」

「よしこれだあー！！」

現在ヴァルガス三兄弟とアントーニヨは、ヴァルガス家ではばぬきをしています。

「やった！あがり！！」

「またアオイが一番やな」

「へへへっ」

《ピンポン》

「お客さん？こんな夜に？」

「僕出てくるねー！」

一人勝っているアオイが、玄関へと向かう。

「はい、どちらさまですか？って……君は……」

「こんばんわ……突然で悪いとは思っけど、その……泊めてくれな
い？」

「え……」

そこにいたのは、イタリアよりもさらに北にあるところにすんでいる、少年だった。

「アイス君？」

「お願い、訳は後で話すから……」

「ヴェ、また俺ビリだよー。あれ、アイスじゃんー、どうしたのー？」

「泊めてほしいんだけど……」

「いーよー！」

兄ちゃんって、ほんとなんていうか少しは考えたりとかしないんだね。まあ、僕もアイス君を泊めるのは賛成だけだね。でもどうしたんだろう。家に泊りに来るなんて……なにかあったのかなあ？

とりあえず、アイスはヴァルガス家に泊ることになったのだった。

昔の思い出追いかけて……その1（後書き）

アイスランドはもうアイス君でいいだろうと。

さて、アイス君がヴァルガス家に泊りに来たわけとは……？

あ、リクエストは随時募集中だったりします。

アオイをこんな風にいじめたいとか

アオイと誰かの交流とか、

何でも構いません。

私が書けそうな限りこたえたいと思います。

昔の思い出追いかけて……その2（前書き）

ああ…標準語なのにアイス君が難しい。

昔の思い出追いかけて……その2

というわけで？アイス君が泊ることになったんだよ。で、アントーニヨさんは明日仕事があるからって、帰っちゃった。なら何もばば抜きしに来なくてもいいんじゃない……。ま、いつか。

「それで、アイス君どうかしたの？」

「……これ……なんだけど」

そう言ってアイス君がどこから取り出したのは一冊の本？

「本？」

「違う……アルバム」

「アルバム？」

「子どもの頃のやつ……」

「アイス君が子供の頃の！？わー……ちょっと見たいかも」

「なにか言った？」

「な……なんでもないよお！ー！」

何でにらむのお？怖いよお。

「でも、子どもの頃のアルバムが泊りに来たのと何の関係が？」

「それは……」

ピンポン

「あれ、またお客さんかなあ？」

「出ちゃダメ」

「え？」

「悪いことは言わないからでも今は出ちゃダメ。出たらきつと後悔するから」

「なんで?」

出たら後悔するって……どういうこと?

ピンポンピンポンピンポン……

気になるんですけど！連打すっごいしてるからすっごい気になるんですけど。

それに出ちゃダメと言われると出たくなるっていうのが人間のサガだよ、兄ちゃん！

「ヴェ、そうだねー」

「って、読心術!」?

「ヴェ?何言ってるのアオイ。全部口に出してたよ」

「馬鹿だろこのやろー」

「うう……何このひどい言われよう。もういい、助けになんか言つてやんない」

「うわーん、ごめんよごめんよー!」

てことで……

「はいどちら様ですかー?」

「此処にアイスいるっペー!」?

「あんこうざい。だからアイス逃げるんだ……」

「え……ダンさんと……ノルさん?」

ポリポリ……

「だから後悔するって言ったのに……」

クッキー食べながらそれ言わないでよ！うわーん！！

昔の思い出追いかけて……その2（後書き）

やっぱりノルウェーは難しいです。

もうダンさんとノルさんでいいや、と……

アイス君の子供のころに写真ないだろうとかそういう突っ込みは私も重々承知してますから……はい。しなくていいですよ？っはははははw

でも、アイス君の子供の頃のアルバムとか……見たいです。

昔の思い出追いかけて……その3（前書き）

多分アルバムのお話はこれが最後。

昔の思い出追いかけて……その3

現在、ヴァルガス家のリビングにはアオイ、フェリシアーノ、ロヴィーノ、アイス、ダン、ノルの六人がいた。コの字型に置かれたソファに、まずアオイとアイスが座り、その向かい側にダンとノルそして横のソファにフェリシアーノとロヴィーノだ。そして、アイスはさつきからふくれっ面でカプチーノを飲んでいる。そして先ほどアイス自身の口から告げられた泊る理由が、まさにアルバムにあった。

「北欧の五人でたわいもない話してたら、昔の話になって。それでノルさんが、アイス君の昔のアルバムを取り出したんだね？」

「そう」

「で、アイス君は昔の話されるのが恥ずかしくて、それで僕んち来たんだね。でもさ、アイス君の子供のころどんなだったか僕知りたいなあー！」

「何言ってるの意味わかんない！！」

「そうだっぺ！みんなアイスの子供の頃のこと聞きたいんだべよ！」

「そんなわけないでしょ！」

「兄ちゃんって呼んでた」

「言ってる言ってる言ってる言ってる言ってる！！」

「ヴェ、アオイはにーちゃだったね」

「えー？」

「そうだぞこのやろー。で、この前なぜか兄さん呼ばわりして、今は兄ちゃんだろ？」

にーちゃって……にーちゃって……

「そういえば、アオイってちっちゃいころはよくどこでも転んでた

ねー」

「三輪車に乗ってぬかるみにはまって小麦畑に転がり落ちてたな」

「あ、その時の写真撮ってあるんだよー！じゃじゃーん、アオイのアルバムー！」

「ぎゃああああー！」

「ねーねー、アオイのとおっておきの写真見せるからさー。アイスのとおっておきの写真見せてー！」

「いっぺよー！」

「ちよつと、何勝手に了承してるの！？」

「フェリ兄ちゃんストーッブー！やめてー写真探すのやめてー！」

「どれにしようか、兄ちゃん」

「そうだな……」

「兄ちゃん？」

「ヴェー！アオイがアーサーみたいな顔になってる！？」

「こここ……こわくなんかないぞこのやろめー！」

「待てこらー……！……！」

「これなんかいがつぺ？」

「それよりこつちにきまつてるだろ、あんこの目は節穴だな」

「どうでもいいから貸してそのアルバムー！」

「返すわけにはいかねっぺよー！」

「兄ちゃんって呼ぶなら返してやってもいい」

「それはヤダ！いいから返してー！あ、待って、そんなの持って逃げないでよー！」

こつして僕らは昔の思い出を追いかけた……

「出てこいマカロニ兄弟　　！！」

「ヴェ　　！アオイがアーサーになったよ　　！！」

なんであの二人逃げ脚だけは早いのかなあ！

昔の思い出追いかけて……その3（後書き）

変な終わり方ですが一応このお話はこれで終わりです。

アオイ「え？最終回？」

違います。

次回からは多分またアオイにドタバタしてもらおうと思います。

あー、北欧ってやっぱり難しい！！

ダンが一番難しいです。

お菓子くださいな！……その1（前書き）

ということでハロウィンの話を書きましょう。

お菓子くださいな！……その1

「やほお！お兄さんだよお」

【ばたんっ！がちゃ】

見てない見てない。僕は何にも見てないし、今ここには何も来なかった。うん。なんか犬みたいな耳生えてる髭とか……見てない。

「ちょっとさーいきなり閉めるとかひどくなーい？」

「おかしいなー幻聴が聞こえるー（棒読み）」

「あ、こんなところにめちゃくちゃ可愛い子猫が……」

「子猫！」

【がちゃー！！がしっ！！】

「騙した！！この人こんなたいけな少年を騙した！！」

「いたいけとか、じぶんで言う？」

「……何の用ですか、フランスさん？」

「今日はあの日だよ！」

「あの日？」

「ハロウィン」

「……あー、そういえばそうでしたね」

「なにその反応」

いや、正直。元日本人の僕はハロウィンにあまり興味が無い。まあ親しみが無いんだよね。日本じゃまずやる人見たこと無いからね。外国の行事だなんて感じ。お菓子くれなきゃいたずらするぞ、なん

て日本でいつて通用するところは、ネズミのあの夢の国以外無いよね、多分。だから僕はハロウィンと言われてもそーですね……になるのだ。某お昼の番組のあれじゃないよ。「今日ハロウィンみたいですね。」「そーですね!」…………ちがうちがう。

「で、ハロウィンだから何故家に?」

「やだなあ、そんなの…………決まってるでしょ?」

「へ?」

兄ちゃん。なんかすごくいやな感じがします。というか……

兄ちゃんいまどこにいますか?

お菓子くださいな！……その1（後書き）

フランスとアオイを絡ませるのは楽しいです〇）
さて、どんな仮装にするか考えねば……（〇

お菓子くださいな！……その2（前書き）

今日はなんとハロウィンです。

でもそんなに話は進みません。

しばらく続きそうです。でも、キタユメ。でも一週間くらいハロウィンやるそうなので、いいですよね！

さて、いよいよアオイ君仮装します。

お菓子くださいな！……その2

と、いうわけでハロウィンだよ！

で、警察に通報させて……！！

「ははは！無駄な抵抗は止めて、おとなしく言うことを聞きなよー」

「断固拒否する……！」

痴漢だよー！明らかに不審者が、15歳の少年の服脱がそうしてる……！！

「何だよー、お兄さんがせっかく着替えさせてあげようと……」

「自分でできるよ……！」

「あ、ならはじめからそういつてよ！アオイのはこれね！」

「……カボチャ……のかぶりもの？」

案外までもで、内心ほっとしたアオイは、フランシスに渡された衣装に着替えた。頭にあのカボチャを被り、茶色いベストにオレンジ色のシャツ、ベストと同じ茶色いネクタイに……

「なんでカボチャパンツ！？上半身まともなのに……！オレンジ色してるし！カボチャはいてるみたいだよ……！」

「カボチャの妖精さんだよ……！」

「なんで力説してくるの！？しかもカボチャの妖精さんって何！？」

「ハロウィンの時だけにでてる妖精さんだよ。アオイ知らないの？」

知るか……やめて、僕はアーサーさんみたいにそう言うのは見えな

いから！！

「これは却下！」

「……そんなにアオイ下半身裸になりたかったの？」

「んなわけないでしょうが！！！」

とりあえず、カボチャパンツはやめにして、茶色とオレンジと赤のチエック柄の膝上ズボンにした。最後に膝下の黒いソックスとそれより少し短い茶色いブーツで完成である。

「うん、たぶんまとも……だね」

「なんか、つまんなーい」

「つまんなくないです！！」

むしろ面白い格好って言うより、あなたのはもう……なんて言うか……あれだからね！モザイクかかったちゃうような格好だからね！！……って、あれ……

「そういえばフランスさん。その格好って、いつもの猫じゃないですよ？」

「そうだよ！いつもネコミミばかりじゃあきるからね！」

「あきるとかで決めるんですか？で、それは一体何の仮装ですか？」

「オオカミ男さ！」

「……そうですか……」

まあ、でしょうね。それしかないもんね。うわー危険だなー。やっぱり警察呼ぼうかな。それが、ルートさんが誰か強そうな人呼ぼうかな。そうしようかな。

「ま、いつか。さーてと、ほかの人の家行ってみよう!」

「お兄さんも行く」

「ついてくるんですかあ?」

「何かな?その嫌そうな顔は。あ、わかったー!照れ隠しでしょ。もー隠さなくてもいいのにー!」

「んなわけない

!」

気……気を取り直して、お菓子もらいにいこー!

「あ、フランスさんもお菓子ください!」

「あー、お兄さんお菓子忘れたから、いたずらしてあげるよ!」

「それなんか違うっ!ちよっと……近づかないでえ!」

そしてかぼちゃの妖精さんは、オオカミに追われながら、お菓子をもらいに出かけたのです。

お菓子くださいな！……その2（後書き）

かぼちゃパンツって、どんなのだか伝わりましたか？

って、皆さんご存知ですよね？

かぼちゃっぽいパンツです。（そのまんま……）

ま、細かいことは気にしないで……

さて、此处でお知らせです。

本日をもちまして、一週間に一話更新をやめようと思います。

この作品に限らないことなのですが、

理由としては、1週間に1度と決めて、それに間に合わせようとして更新するのでは、いい内容が書けないと思ったこと、あとは、更新したい話があるのに1週間開けるのはなんかいやだったのが理由です。まあ、ほかにもあるんですが。

なので、明日11月になりますので、それを境として改めて不定期更新に戻そうと思います。

不慣れなこともあり、いろいろ試行錯誤しているため変更ばかりで申し訳ありません。これからもこの作品を少しでも楽しんでいただきたいと思います。

2011・10・31 五十嵐黎鬼。

お菓子くださいな！……その3（前書き）

というわけで今日から不定期更新だぜ！

まあ、ハロウィンただ書きたい＆フランス暴走させたい＆アーサ

ー不憫にさせたい＆アオイ書きたい……からなんですけど。

というか、もうハロウィンおわたよね？

いいのか……

お菓子くださいな！……その3

かえりたいよー。うえーん。

「なんだい！？人の家に来てそれはないだろう！」

「アルフレッドさんの持つてゐるそれがなかったら僕此処にいてパーティーを楽しみたいですけどね？それなんですか？」

「ケーキだぞ。いたって普通の」

「普通の……がそんな、色してるわけですか」

初めて見たな。蛍光オレンジのケーキなんてさ。あはは、食べれるのかなあ。て、アルフレッドさんが食べてるから、まあ食べれるんだろうけど。……でもあの人、何でも食べそう。アーサーさんのあれ以外。そうあれ以外。

「ほかにお菓子ないですか？僕そんなにおっきいの持つて帰れません」

「仕方ないんだぞ。そういう理由なら、こっちのキャンディーでいいかい？」

「わー、そっちの方がまだまし……じゃなかった、ありがとうございますう！」

うん、真っ青だけどね。きれいだなー。でもオレンジケーキよりましだね。

「……ところで、アルフレッドさん」

「なんだい？」

「事故ったんですか？」

「なんでだい？」

「だってそんないつぱい包帯巻いてるじゃないですか」

「DDDDDD！違うぞこれは、ミイラ男さ！」

「ああ！仮装してたんですね！よかった、またスタントとかヒーローごっこしてどっから飛び降りたのかなーなんてね」

「あ、それは昨日やったんだぞ！」

やったのぉ！？やめてください、よい子はまねしちゃいけないようなことしないで！

「今度アオイもどうだい？一緒にやろう！」

「いやです！」

「えーなんでだい？」

「えーじゃないです。そういうのはジャッキーにでも任せればいいんです」

「そうかい？」

「そうです！じゃ、僕これからお菓子もらつたびに戻るんで！」

こうして、危なっかしいミイラ男のもとを後にしたアオイでした。

「どうでもいいけどさあ、お兄さんのこと完全無視して話進めないでくれないかなあ？」

「あ、いたんですか」

「ひどっ！なに？アーサーいないからって、不憫要員になっちゃったわけ？お兄さんマジ傷つくよ」

「さー次はだれの家行こうかな！」

「アオイ！」

お菓子くださいな！……その3（後書き）

フランスも不憫にしてやろう。そうしよう。

アーサー出てこないんだもん。仕方ないね。

で、アルフレッドがミイラなのは、単なる気まぐれです。

お菓子くださいな！……その4（前書き）

いつまでやるんだ……今日中に終わるんですか？
誰か教えてください……

お菓子くださいな！……その4

「菊さん！トリックオアトリートです！！」

さて、僕（+おまけ）は海を飛行機で渡って菊さんの家に来たんだよ！あ、飛行機代は+おまけさんの提供です！

「+おまけつてさあ、誰のことかなあ？」

「あ、まちがえた。+オオカミさんですよ」

「お兄さんもうダメージあり過ぎて死にそう」

「では、私があのに案内して差し上げましょうか？」

「あ、菊さんなんか物騒なもの持ってる……鎌？」

「デスサイズです」

「ということはその格好は……」

「水先案内人しながみですね」

それで、大きな鎌持ってるんですね。特殊メイクなのか、なんか顔色が怖いです。頭の三角のあれが、リアルです。怖いです。微笑まれても怖いです。

「さて、アオイ君」

「はい？」

「なぜかばちやパンツではないんですか？」

「え！？」

「ほらな、菊もそう思うだろ！」

「ええ、そこまでかばちやを貫くなら、かばちやパンツはもはや外せませんよ？」

「ええ

！？菊さんまでそんなこと言うんですかあ！

？」

「まあ、無理強いはしませんが……ともあれよくお似合いですよ。アオイ君のかわいらしさが際立って。写真撮ってもいいですか？」

「ど……どうぞ……」

菊さんの気がすむまで撮影会は続けられた。

「ありがとうございます。それで、お菓子ですね。あまりアオイ君が好きそうなものがないのですが、どれにします？好きなのをどうぞ」

と言って菊さんはお菓子がいっぱい入ったかごを取り出した。すごいよ！もう日本のお菓子メーカーのヒット商品がそろってるんだよ！コンビニだって負けてるほどの品ぞろえだよ！どうしよう、きのこだけのこあるんですけど！！でもでも、ポッキーも欲しい……。あ、チョコパイ……。チョコパイだあ。

「チョコパイください！！これ好きです大好きです！でも高くてなかなか……」

買えないんだよお。日本に生きてた時のおこずかい一カ月2000円だったんだよ。欲しい漫画とか買ってたらそんなチョコパイなんて、高級菓子の仲間入りなんだよ？

「ではどうぞ」

「ありがとうございます！あ、お礼にアルフレッドさんからもらった飴一個どうですか？」

「……善処します」

やっぱ青いのはダメみたいです。だろっね。どうしよう。10本

もらってたんだよ実は。よし、ハロウィンが終わったら眉毛にプレゼントしよう。ああ、なんて僕はいい子なんだろ。日ごろの感謝をこめてね。

お菓子くださいな！……その4（後書き）

菊になら、命狩られても本望な気がする。

死ぬ間に菊の顔見れるんだから最高じゃね？
まだ死ぬような歳じゃないんですけどね。

没ネタとして、菊マッドサイエンスバージョンも書いたんですが・

・
もうキャラ崩壊しまくりだったのでやめました。

お前を解剖してやろうか的なセリフを菊に言わせてました・・・

お菓子くださいな！……その5（前書き）

仮装のネタがない……バリエーションがなさすぎる。

もうどうしよう。

と言いつつその6で多分終わる。というかわれ。

お菓子くださいな！……その5

「あれー。アオイとフランシス兄ちゃんだ！」

「げっ、ワイン野郎！何しに気やがつたんだこのやるー！」

「兄ちゃんたちこんなとこにいたんだ」

次の家に行く道の途中で、そういえば朝からいなかったフェリ兄ちゃんたちに会ったよ。

「そういえば、朝お菓子もらい行くのにアオイ誘うの忘れてたな」

「ひどっ！僕置いて勝手に行くなんてひどいよお！」

「寝てるやつが悪いんだこのやロ」

ええっ！？僕が悪いの？ふえーん……にしても二人して何でかぼちやなのお？

「かぶっちゃった……」

「ヴァルガスかぼちゃ三兄弟？」

「フランシスさん、知ってたなあ！」

「あれー何のことー？お兄さん知らないなあ」

「しらじらしい……て言うかフェリ兄ちゃんかぼちゃパンツ……」

「なんかさー、菊の家に行ったらこっちの方が絶対にこっちのほうが良いって。兄ちゃんも言われたんだけどさあ……」

「だ……誰がそんなもんはるか！」

だよね……うん、わかるよロヴィーノ兄ちゃん。あ、二人ともいっぱいお菓子もらってるなあ。すごい。

「そうだー、ローデリヒさんとねー、エリザさんがね、これアオイ

につて」

「わーい！」

やったあ、後でお礼を言いに行こう！

「それとジャガイモ野郎からは、これだぞ」

「ば……バウムクーヘン一個丸ごと……」

「すごいよねー。俺と兄ちゃんにも一個ずつくれたんだよー」

兄弟で一個でいいんですよルートさん……食べきれるかなあ。

「そっだー、アオイもさ一緒に行こう！」

「え、どこに？」

「言っても損するだけだぞ」

「それどこ??」

「よーし、レッツゴー！」

それ英語だよ兄ちゃん!!ま、いいけどさあ……

で、兄ちゃんに手をひかれて付いた先は……

「かつわかわええよーん!!」

「むっっちゃ樂園やんかー!!」

アントーニヨさんの家でした。何かリンさんもいるんですけど……あ、あのお兄さんは不在ですか?そうですか。あの……

「近iiiiiiiiiiiiiiii!!」

「何これめっちゃかわええやんか!!うちもかぼちゃにすればよかった!!」

「リンさんは化け猫さんですか？」

「そうやでー！」

「お前、海賊とかありきたりだぞこのやロー」

「そうなんやけどなー、これくらいしか思いつかんかったんや。親分カツコええやる？」

「ちぎつー！海に沈んでろ！」

「アントーニヨ兄ちゃん似合ってるよー。だから……」

「「トリック・オア・トリート……」」

「ええでー、うちからはこれ！タルト・オ・マトンやで！たんと持つてってなー！」

「親分はチュロスやで！ロヴィーこれ好きやろ？」

「別に好きなんかじゃねーぞこのやろー！」

「ロヴィーめっちゃ顔赤くなってるん！かわええわー！」

さっきから二人とも可愛いとしかいってないよ。それに、こんなにたくさんどうしろって言うのー！？みんな限度ってものを知ってるのかなあ？でも……おいしいからいいよね。タダだし。

お菓子くださいな！……その5（後書き）

もう仮装が思いつかない……だから
三人そろってかぼちゃだよ……orz

あ、リーンはベルギーさんです。

かわいきゃいいよね！

次でハロウィンは終わるはずですが。
今日中に終わると思います。

お菓子くださいな！……その6（前書き）

てことで終わりますハロウィン。

お菓子くださいな！……その6

アントーニヨさんの家を後にした僕たちは、そのあとそれはそれは多くのお家をめぐって、たくさんのお菓子を手に入れたんだよ。これからしばらくはお菓子に困らないな。あ、そういえば……

「兄ちゃんたち先に帰ってて。僕ちよつと寄るところあるから」

「うん、わかったよー。あんまり遅くなっちゃだめだよ？」

「迷子になつてもしらねーそのやロー」

「大丈夫だよ。すぐそこだから」

そして向かった先は

「アーサーさんー！」

「んだよかぼちゃ」

「かぼちゃ言うな！これハロウィンだからあげるねー」

「……おいこれ……」

「何？何か文句あるのかなあ？せつかく僕があげるのにねー？」

「これアルフレッドのこの菓子じゃねーのかこの色」

「そうだよ。でも僕そんなにいっぱい食べれないから。あげるんだよ」

「人に押し付けんなよー！」

「まあまあ、遠慮しなくていいから。じゃ、僕帰るね。あんま遅いと兄ちゃんたち心配するから」

「ちよつと待て」

「ん？ゲツ……」

ぎゃああああああああああああああああああああああ

あー！！

なんか煙でてる変なの持ってきたよー！！

「あー……アーサーさん？それなに？」

「俺特性のスコーンだ。砂糖控えてるから遠慮なく持つてけ」

「いや……」

もう何か砂糖控えてるとか此処こたわってるんだとか、関係ないよね？もはや炭と化してるって言っただよそれ。なんか涙出てきたけど、煙が目にしみてるんだよね！？おかしいなー、お菓子にそんな不可抗力いらないんだけどー。むしろやめて。ぷすぷすいつてるんだよ。鳴き声かなスコーンの。初めて聞いたな。

「いや、いいですいいです。飴あげただけなんで……僕もう帰らないと……」

「そんなこと言うといたずらするぞこの野郎」

ええー！？スコーンかいたずらって……アーサーさんのいたずら？どっちも罰ゲームじゃねーかこのやローちぎー！！って叫んでもいいかなロヴィーノ兄ちゃん！！うえええん！ほんとに泣いちゃいそうだよー！！

アオイはしぶしぶスコーンを受け取り、家へと帰ったのでした！

チャンチャン

数日後

「ちょっとピエール……なにかなそれ？」

「ピピピ！」

ピエールは小包とそれに添付された手紙をフランシスに渡した。

【フランシスさんへ！　そういえばお菓子あげてなかったですね！　なのでこれは僕からのほんの些細な……ほんのささいなハロウインのお菓子です！　PS 僕が作ったんじゃないよ。　アオイ】

「そうだね。これはアオイが作ったんじゃないね……あのくそまゆ毛だな……お兄さんにどうしろって言っのさ！　！」

お菓子くださいな！……その6（後書き）

フランスス不憫ハロウィンでした。

終わった。やっと終わりましたハロウィン！！

ピエールがああのでスコーン運べるのが少し心配です。

アーサーの仮装？なにも思いつきませんでしたorz

ご想像にお任せします。

寒いと布団から出たくなるのは僕だけ？（前書き）

寒くなってきましたね。

夜より朝のほうが寒い気がするのは気のせいでしょうか・・・
マフラーと手袋は必需品ですね。

寒いと布団から出たくなるのは僕だけ？

1年ってあつという間だね　なんて思う季節になったね。ああ、今年もいろいろあつたなあ、なんて思うわけだよ。いちばんのできごと？そりゃ……死んだことでしょう。今となつてはいい思い出？にはならないか……。て言うか……

「寒ッ……　つぶしょん！！あうゝ今何時？」

枕元の目覚まし時計は午前6時を少し過ぎた時間をさしていた。

「まだ寝てても大丈夫だよね」

兄ちゃんたち起きるの遅いしね。8時に起きても僕が一番に目が覚めるっていうね……。いいのかなあ。てわけで、おやすみなさい。二度寝だw冬の二度練って最高だよね^^ふふふふ

ぎゅむつ

「ちょ……誰？兄ちゃん？朝からいたずらやめてよお……。ていうか、重い……」

ぎゅむつぎゅむう！！

って、まてまて、いくら兄ちゃんでもこんな朝早くいたずらしようなんて思いつかないっていうか、思っても実行できないから！！それに兄ちゃんがこんなに静かなわけがない！！ヴェヴェって言うてるから！！え？ちぎつのほづじやないのかって？ロヴィーノ兄ち

やんがこんなことするわけないじゃん。十中八九フェリ兄ちゃんだよ。もしできるならね。それに……何か人間にしてみたら軽い……？

「一体何なのお！？ってうわあああああ！！」

何この真っ白くて丸い変な生き物！！アーサーさんの友達か何か！？朝から衝撃的すぎるよお！！

「I・m American！！」

「ひぎゃああああああああああああああああ！！って……え……夢？夢え！？」

まさかの夢オチって……でもある意味怖かったよお！！誰かに似てたけど……誰だろ……ていうか「私アメリカ人！！」ってなに？アルフレッドさんと何か関係あるのかなあ。

まさかそのあと、兄ちゃんが遊びに行ったエドアルドさんの家で、まさかの再会を果たすとはそれこそ、夢にも思っていない僕は、二度寝という目先の極楽に旅立ったのだー！！1分後……

「アオイ アオイ !おなかすいたよー！パスタパスタ！」

「おなか減ったぞ、なんかつくれこのやろー！」

「……寝かせてください、兄ちゃんたち」

しかも……二人とも料理できるよねえ！？なんでぼくにすがってくるの！？あ、今日の御飯当番、僕じゃん。眠いよお……兄ちゃんたち早起きだ寝珍しく……。

「だっておなかすいたんだもん！パスタパスター！」

「そう……おやすみ……zzzzzzzzzz」

「ヴェー!?」

「ちぎッ!!起きろこの野郎!!」

やめてー！僕の布団返して　!!うつ……二人ともお母さんみた
いだよ……。あ、兄ちゃんたちだからおんなじみたいなものか……
……。しかたない、パスタ作ろう。

寒いと布団から出たくなるのは僕だけ？（後書き）

久々なのに、夢オチ？

なかなか起きないフェリシアーノ。（多分ロヴィーノもそうだろうと仮定）

で、立場逆転させてみました。

いつもはアオイが起こしてるけど、今日は起こしてやろう！みたいな。

おじいちゃん来ちゃった!?!……その1(前書き)

最近1話完結じゃなくなってますね。

徐々にアオイの生きてる時のエピソードとか交えたいですね。

コメディーだけど、まじめな話もするよ!

で、今回は……

はい、来ちゃいましたよあの人がつ!!

「ん？ああ、フェリシアーノとか、ロヴィーノはもう随分前からいるしな。じいちゃんが生きてた頃から。でもおまえは違っただろ。神様に聞いたぞー。お前はじいちゃんに似て優しい奴だったんだなあ」
「さりげなく自分優しいよアピールしてるね……。って、あの神様に会ったのお！？」

「今日はその神様に頼んで会いに来ちゃった！てへ」

「てへ……………じゃないよ！！」

「フェリシアーノ達は元気か？」

「え、会いに行けばいいじゃないの？兄ちゃんたち自分の部屋で寝てるし……………」

「んー、神様にアオイにだけ会うつて約束しちゃったからなあ。会えないんだよ。残念だなあ。じいちゃんのかわいい孫みんなに会いたかったんだけど」

「みんなって……………何かほかにもいっぱいいるような誤解を招く発言しちゃだめだと思う」

ていうか、冗談に聞こえないよお祖父ちゃん。笑いながら言うのやめて！！って、あれ……………。

「神様って……………もしかして……………」

「お前を生き返らせて此処に転生させた神様だよ！！」

「じゃ……………じゃあ……………」

もしかして……………お祖父ちゃんは知ってるの？僕がほんとにヴァルガス家の三男なんかじゃないってこと……………。

おじいちゃん来ちゃった!?……その1（後書き）

そういえば、私が最初にヘタリアで書いた長編？小説。

ローマじいちゃんの話でしたね。ローマじいちゃん、かっこいいのに可愛いです。

さすがあの二人のじいちゃんだとつくづく思います。

そついうところ出せたらいいなーと思います。

ローマじいちゃんの名前どうしよう……

じいちゃんでもいいですかね。もうセンスがないし、レパートリーもないので……

おじいちゃん来ちゃった!?!?.....その2

あの神様に会ったってことは、それってつまりおじいちゃんは.....

「ねえ、.....じゃあお祖父ちゃんは僕が元日本人だってことも、ア
オイ・ヴァルガスじゃなくて、近藤葵だってことも.....」

「知ってるぞ」

「じゃあ.....」

「お前は俺のかわいい孫に変わりないけどな！」

「っ.....」

ずっと不安だった。だってすんなり受け入れられて。誰も違和感
感じていなくて。でもぼくは違和感とか、新しい環境に慣れなくて
でもそれをだれにも打ち明けられなかった。だから、アーサーさん
とかフランスさんとかに意地悪.....というか悪ふざけ的な事して、
気を誤魔化して。

でも、それでも.....僕はここにはいなかったはずの人間だって、ど
こかで思ってた自分がいて。

「おじいちゃ.....僕.....」

「おいおい、いきなり泣き出してどうしたんだ!?!」

「僕ね.....死んじゃったんだ.....でも、生き返らせてもらって.....
戸惑ったよ。だって、周りのこと僕は誰も知らなかったのに、でも
みんなは僕のこと知ってたんだ.....。だから、すぐくこわかった.....
僕がみんなのこと知らないって.....気付かれたら、不気味から
れるんじゃないかって.....。でもっ.....」

「この世界じゃ、幸せか？」

「っ……うん」

「そか、ならよかった！アオイがそう思えるようになってよかったな！」

そういつて、お祖父ちゃんは僕を抱きしめた。涙が止まらない僕をなだめるように、やさしく頭をなでってくれるそのしぐさは、孫にお祖父ちゃんがしているその光景そのものだろう。

「お祖父ちゃん……僕ね、この世界来て……僕初めて兄弟出来た」

「そうかそうか」

「この世界来て……はじめて一緒に暮らせる家族ができた」

「そうかそうか」

「はじめてっ……はじめてお祖父ちゃんができたよ」

「そうかそうか」

特にお祖父ちゃんは何も言わなかった。きっと、僕の過去も知ってるんだろう。ほんとプライバシーの侵害だな。今度僕が神様に会う機会があつた時はアオイパンチだからね。でも、何も聞かれずにホッとしてる。言いたくなんかないし、正直あの生まれ変わる前は今では考えられない生活だった。

「お祖父ちゃん……会いに来てくれてありがとう……」

「また会いに来れるかわかんないけど、とりあえずじいちゃんもあってよかったよ」

「ん……神様……も……僕を此処に生まれ変わらせてくれて……あり……がと……」

そう呟いて、僕はじいちゃんの腕の中でそのまま眠りについた。

おじいちゃん来ちゃった!?!.....その2(後書き)

実はいろいろ壮絶?な過去を持つてるアオイなのです。

じいちゃん優しい。ちよつとまじめな話にしてみた、の結果がこれです。

さて、続く.....んですかね?

近藤葵の生活

目が覚めたら、朝日が差し込んでいた。此処は僕の部屋のベツドの上。どうやらあの後、お祖父ちゃんが運んでくれたようだ。しばらく布団の中にうずくまっていたけど、そつとベッドを抜け出して窓の近くまで歩く。地平線から出たばかりのそのまん丸な太陽は、僕に向かって真つすぐまばゆい陽光を放っている。ふと、窓ガラスに映る自分と眼があつた。死ぬ前とは少し違う外見。でも、間違ひなく僕だ。見かけが少し違うだけで、魂は同じ。近藤葵でも、アオイ・ヴァルガスでもどっちでもいいんじゃないかと、思う。そうそう、久しぶりに昔の夢を見たんだ。

僕が幼稚園に入るころから、僕の家は家庭崩壊というものだった。

僕の家は両親と僕の三人だった。けど、お父さんはそれほど家庭を大事にはしていなかった。小さいアパートにひつそりと住んでいたから、それほど裕福だったわけじゃないけど。それなりの生活はできてた。けど、今思えばそれはお母さんのやりくりのおかげかなと思う。お父さんがなにも働かず、遊ぶ毎日を過ごしてて、夜も帰つてこないことが多かった。久しぶりに帰ってきたと思ったら、お母さんからお金を奪つてまた出てく。そんな感じだった。だから両親の仲はいいわけがなく、しょつちゅう喧嘩ばかりしていた。ありがちな話だね。でもそれが僕の目の前で起きてて、とても笑い事じゃなかった。お父さんがお母さんを殴ったりけったりしてるのを僕は見れなかった。見たくななくて、自分の布団にくるまって耳

を押さえて必死に涙をこらえて耐えた。心の中で、早くお父さんがどこかへ行ってしまうことを願いながら。

僕はもともと近藤葵^{はやみあおい}って名前じゃなく、その前は速水葵^{はやみあおい}だった。

そう、両親は僕が小学生になるちよつと前に離婚した。お母さんに連れられて二人で暮らし始めた。でもお母さん一人で小学生の僕と一緒に暮らすのはまた大変で、お母さんはそれこそ1日中働いてたこともあった。それでも、お父さんがいたところに比べたら、少し笑顔が戻ってきてたみたいだったな。必死で僕を育ててくれてるお母さんに、僕は迷惑とか負担をかけたくなくて、小学生なりに気を配って、お手伝いした。家事とかも、出来る範囲でだけど自分からやった。小学生とかのときって、結構いろいろほしいものとかもあるおもちゃとかね。学校で流行ってるものとか欲しいなって思わなかったわけじゃないけど、それでも言いだせるわけもなく、我慢我慢って呟きながらお店の前を通り過ぎてた。

そんな頑張ってたお母さんも、僕が小学5年生になった夏に死んじゃった。働き過ぎて、それで仕事の帰りに事故に遭って帰ってこなかった。それから、僕は一人ぼっちになった。もともと親戚なんか知らなかったし、お父さんなんか行方なんかわかるわけもなく、お母さんには兄弟もいなかったし、祖父母も僕が生まれてすぐに死んだって聞いたから真正銘僕は一人になった。

それから中学になるまでは施設で過ごしてたけど、馴染めなかった僕は、中学に入学する時に一人暮らしを始めた。お母さんが僕の将来のためにつて貯金を残しておいてくれた。それを大事に使いつつ、何とか過ごしていた矢先だった。

あの事故で僕が死んだのは……。

今思い出すとなんかのドラマにありそうな話の暮らしをしていたなって思う。この世界に転生した今では、考えられないほどだ。

「さて、朝ご飯作らないとね」

一階のキッチンに降りる。まだ二人の兄は寝ているだろう。鍋に水を入れお湯を沸かす。三人前以上の分量の Pasta を取り出す。あの二人の兄は朝からでも大量に食べる。それを思い返していると自然に笑みがこぼれる。とても年上とは思えない兄。でも一緒にいるととても安心する。彼らの性格のせいかもしれないけども、アオイは確かに幸せだと感じている。

「ヴェ、良いにおいする」

「トマトたっぷり使えよこのやロー」

「あ、兄ちゃんたち」

「アオイ、おはよう」

「おはよう」

「うん、おはよう」

はじめて『おはよう』って言ったのは、このヴァルガス家に来たあの日だった。お父さんはわからないけど、お母さんのことを好きじゃなかったわけじゃない。もちろん、前の世界に未練がないわけじゃない。けど、けどこの世界を知ってしまった今。

「フェリ兄ちゃん、ロヴィーノ兄ちゃん」

「なーに？」

「んだよ？」

「二人が僕の兄ちゃんであれいいよ。いつも一緒にいてくれてありがとう」

「ヴェ？どーしたの？」

「何言ってるんだこのやロー」

「えへへ、なんでもないよ。さ、朝ご飯にしよう。今日会議でしょ

「？」

「ヴェ？そうだったけ？」

「ちぎッ、忘れてんじゃねーぞ」

ありがとう、僕の兄になってくれて。

近藤葵の生活（後書き）

よくありそうなアオイの過去でした。

ですがありがちなのが意外と恐ろしいというか悲しいんじゃないかとも思います。

近藤というのはお母さんの苗字です。アオイは三回も名前変わってるんですね。

アオイが料理とか洗濯とか出来るのはそういう生活があったからです。

苦労人なのは相変わらずですね。

今回最終回っぱいですが、一応今年いっぱいまでやろうかと思えます。

それまでお付き合いください。

俺らの弟がこんなにかわいいわけがない……その1（前書き）

さて、前回まではなんか昼どらっぽいまじめなシリアスなお話でしたが。

今回からまた通常運行しますよ！

さて……今回珍しくアオイ視点ではなくある人視点なんですけどその人、ねつ造キャラです。
私が一から練りだしました。
なので、正直びくびくしております。

あとサブタイはまあパクリですね。あるマンガの。
でも私その漫画読んだことない
なのであまり深く突っ込まないでほしいです。

俺らの弟がこんなにかわいいわけがない……その1

久々に愚弟の家に帰って見たら、見知らぬ男がいた。いや、男というよりは幼い容姿をしている。とか、いったい何者だこの男は。まさか……

「まさか愚弟のやつの隠し子か？ いや、それにしてはちょっとでかすぎる……」

「すぴー」

というか、人の家で（正確には愚弟の家だが）此処まで堂々と寝ているとは、ますますこいつが誰だか知りたくなってきた。仕方がない、起こすか。いや、だってあの愚弟はまだ帰ってきそうにないというか来るな。ということ、このソファで寝ている正体不明の男を起こす。といっても、ただ声をかけるだけだ。うるさい、俺は誰かに触れるとかそういうスキンシップ？ が嫌いなだけだ。そこには触れるな。

「おい、ちよつと起きろ」

「ん……すぴー……すうすう……」

「起きろと言ってるだろうがー！」

「ん……兄ちゃん、泣くのよしなよお……」

「なっ……」

というか、こいつ。あれだけ大声で声をかけているのに、なぜに起きない？ それに兄ちゃんって……あの愚弟にも言われたことないんだぞ！ て、そこじゃないそこじゃない。照れて顔が赤いだと？ そこに触れるんじゃない。別に照れてもいない。そこ、これ以上触れるなと言ってるだろう！

そんなこんなでその男が悶絶？をしていたところに、新たな人物が現れた。

「おや、来ていたのか？まさかあなたに先を越されるとは……どうかしたのか？」

「ああ、兄貴か。いや、こいつ……」

「おやおや、あの馬鹿な弟の隠し子ですか？」

なぜ同じことを始めに思うんだ。そしてそれはこの男の年齢的に可能性として成り立たないだろう。というか、その笑みはなんだ。

「何をたくらんでる？」

「いえ、この子を使えばあの馬鹿弟にさらなるいやがらせができるかと、そう思うだけで自然と笑みが浮かんでてしまってますね」

「ああ、なるほど」

上品に笑っているようで見えて、腹の中でそんな恐ろしいことを考えているから、この兄は恐ろしい。おそらく、愚弟があんな風に育ったのは6割この兄のせいだろう。あとの3割がもう一人の兄で、後の1割は多分俺だが。

そんなことを思っていたからだろうか最後の兄が現れる。

「何の話をしているんだい？」

「兄さん、あの馬鹿弟、隠し子いましたよ？」

「ほう……僕に似て、賢そうじゃないですか」

「どこがだ（ですか？）」「」

このうぬばれ野郎め。そこがなければ尊敬できるいい兄だと思うのだが。あれら三人、そしてあの愚弟それぞれに一つずつ正確になんらかの欠点があるのが共通しているのがある意味かなしきことだ

な。

「ん……兄ちゃん……ご飯まだだよお……」

その一言をこぼしたのはソファで寝ていた少年だ。そして、その一言で俺ら三人は動きを止めた。

「」「何これかわいい……」「」

くしくも、内心そう思っていたのは同じだった。

俺らの弟がこんなにかわいいわけがない……その1（後書き）

誰だか分りますか？

ソファで寝てるのじゃなくて
会話してる三人組です。

正体は次回明らかになると思います。
人名も考えねば。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9992t/>

ヴァルガス家三男です。

2011年11月30日17時48分発行